

CHAPTER

2

安全・円滑な 大会運営に向けて

神奈川県・横浜市では横浜国際総合競技場とファンゾーンに来場されるお客様の安全を確保し、大会を円滑に開催運営するために、大会組織委員会、警察、消防、交通事業者など、関係各所と緊密に連携しながら、様々な準備を行った。



開催都市 神奈川・横浜

大会主催者及び 競技団体

ラグビーワールドカップ™を主催するワールドラグビーは、世界のラグビーを統括する機関で、ラグビーを普及・発展させるために、様々な施策を行っている。

その施策の主な資金源となるものがラグビーワールドカップの収益であり、その収益は各ユニオン（協会）に分配されるほか、いろいろな国際大会を開催するなど、様々な形で活用される。

ワールドラグビーはラグビーワールドカップを運営する専門会社として出資100%の子会社「ラグビーワールドカップリミテッド」を設立。同社に準備・運営を委託している。

一方、日本ラグビーフットボール協会は、2009年にラグビーワールドカップ2019™の日本開催が決定した際、ラグビーワールドカップリミテッドと開催協会合意書を結び、開催協会（ホストユニオン）となった。

また、日本ラグビーフットボール協会は、2010年11月に開催協会合意書に基づき、大会の準備・運営を行う専門機関「ラグビーワールドカップ2019組織委員会」を立ち上げた。同組織委員会は公益財団法人として、大会に向けてラグビーワールドカップリミテッドと密に連携しながら準備を進めた。

ラグビーワールドカップ2019関係組織図



開催都市の役割

2015年3月、神奈川県・横浜市は開催都市に決定し、同年8月、ラグビーワールドカップ2019組織委員会と県・市の3者で「ラグビーワールドカップ2019開催基本契約」を締結した。

同契約に定める開催都市の役割としては、次のとおり。

- (1) 交通、警備などの公共機能の提供
- (2) マーケティング活動の支援
- (3) シティドレッシング
- (4) 関連イベントの支援
- (5) 環境と共生に配慮した大会開催への協力
- (6) ボランティア・プログラムの支援
- (7) レガシープログラムの支援
- (8) 試合開催会場の提供
- (9) 練習会場の確保
- (10) 前各号のほか組織委員会及び開催自治体が別途協議の上合意する事項

開催都市として求められるものは、(1) 交通、警備などの公共機能の提供、(6) ボランティア・プログラムの支援、(8) 試合開催会場の提供などの「開催準備」と、(2) マーケティング活動の支援、(3) シティドレッシング、(4) 関連イベントの支援などの「県域・市域の機運醸成」に大別される。



開催都市発表のパブリックビューイング（2015年3月2日）

推進体制

〈神奈川県・横浜市の推進体制〉

県と市は、2015年8月に締結した「ラグビーワールドカップ2019の横浜開催に係る費用分担及び職員派遣に関する協定書」に基づき、開催都市の役割である開催準備・機運醸成について役割分担を行った。

市が単独で実施する会場整備のほか、共同で実施する大会運営や市内の機運醸成に係る業務については市を実施主体とし、県から市に必要な職員を派遣することとした。一方、市外県域の機運醸成に係る業務については、県が単独で実施することとした。

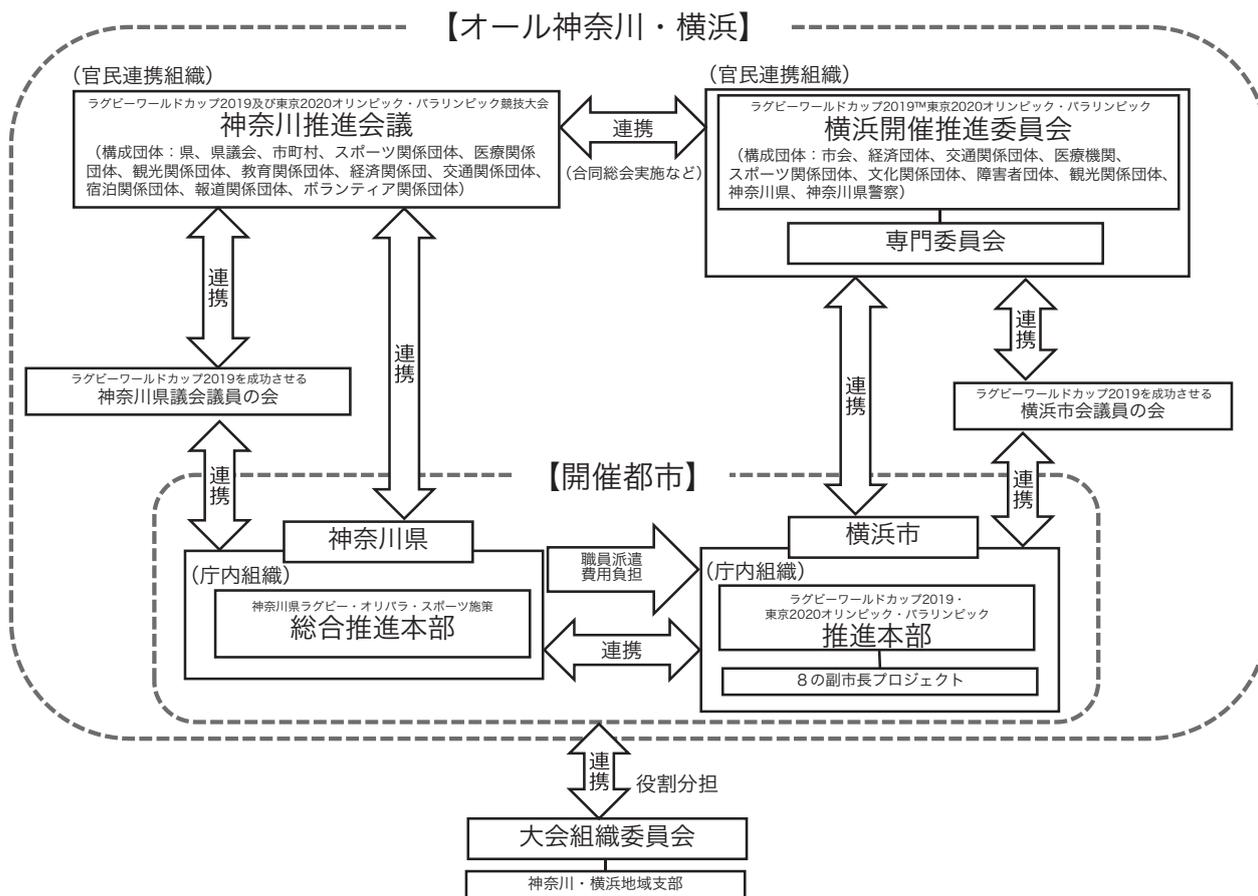
なお、事業費についても同様の考え方で、県と市がそれぞれ応分の負担をすることとした。

開催都市マーク



開催都市が使用するために作られた公式マーク

推進組織相関図



〈開催準備・市域の機運醸成の体制(横浜市)〉

2014年度、市民局スポーツ振興課に開催準備・市域の機運醸成の業務を進める担当が設置され、前述の協定に基づき、市職員と県からの派遣職員で構成された。

2015年度までは、課長1名、係長1名、職員1名の3名体制で、2016年度は課長2名、係長3名、職員3名の8名体制になった。

2017年度にはラグビーワールドカップ・オリンピック・パラリンピック推進課が発足し、ラグビーワールドカップ2019の担当は部長1名、課長3名、係長10名、職員7名の21名体制となり、総括班(庶務、会場整備等)、大会運営班(交通輸送、警備、ボランティア)、機運醸成班(イベント、広報等)の3班体制となった。

さらに2018年度には、ラグビーワールドカップ2019推進部(課)が発足し、部長2名、課長6名、係長15名、職員11名の34名体制となり、2019年度にはさらに係長1名、職員2名が増員され、37名体制となった。

組織規模が大きくなり、業務も多岐にわたったが、本大会の成功に向けて、連携と情報共有を密に行う必要があることから、毎月末にスポーツ統括室長及び部全員が参加して会議を行い、事業進捗を確認した。また、部課長会、係長会などを毎週開催し、縦割りではなく、横断的な組織運営を行った。



ラグビーワールドカップ2019推進部の定例会議

〈県域の機運醸成の体制(神奈川県)〉

2014年度の立候補時から2015年度においては、県政策局総務室内に担当課長1名、職員1名の体制で始まり、2016年度にスポーツ局が新たに設置された後は業務が移管され、スポーツ課内に担当課長1名、職員1名、2017年度から担当課長1名、職員2名の体制となった。

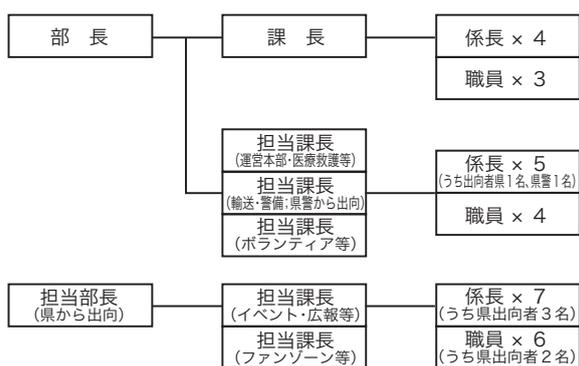
2018年度からは担当課長1名、主幹1名、職員3名の体制となり、2019年度も引き続き同体制で職務に当たった。

〈ラグビーワールドカップ2019組織委員会への派遣〉

2015年度から大会組織委員会への職員派遣を行った。2015年度、2016年度は市から1名(係長)、2017年度は市から3名(課長1名、係長2名)、2018年度は、新たに地域支部が設立されたことから、大幅な追加派遣を行い、市から7名(課長2名、係長5名)、県から3名(担当職員)を派遣した。(うち、地域支部への派遣は、市から5名、県から1名)

2019年度にもさらに2名追加派遣し、合計で市から9名(課長2名、係長7名)、県から3名(担当職員)を派遣した。(うち、地域支部への派遣は、市から6名、県から1名)

横浜市ラグビーワールドカップ2019推進部組織図(2019年9月時点)



〈市の庁内推進組織〉

◆ラグビーワールドカップ2019™・

東京2020オリンピック・パラリンピック

横浜市推進本部

2016年4月にラグビーワールドカップ2019™・東京2020オリンピック・パラリンピック両大会に向けた推進組織として、市長を本部長、副市長及び全区局統括本部長を構成員とする横浜市推進本部会議を設立し、全庁で推進していく体制を整えた。

さらに、区局横断で専門的な課題について検討を行うため、8の副市長プロジェクトを設立した。

推進本部会議では、両大会を契機に横浜の魅力・活力を世界に発信していくための横浜市の「基本姿勢」や「取組の柱」、「取組から生まれるレガシー」などを取りまとめた「ラグビーワールドカップ2019™東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた横浜ビジョン（以下、横浜ビジョン）」案を作成した。

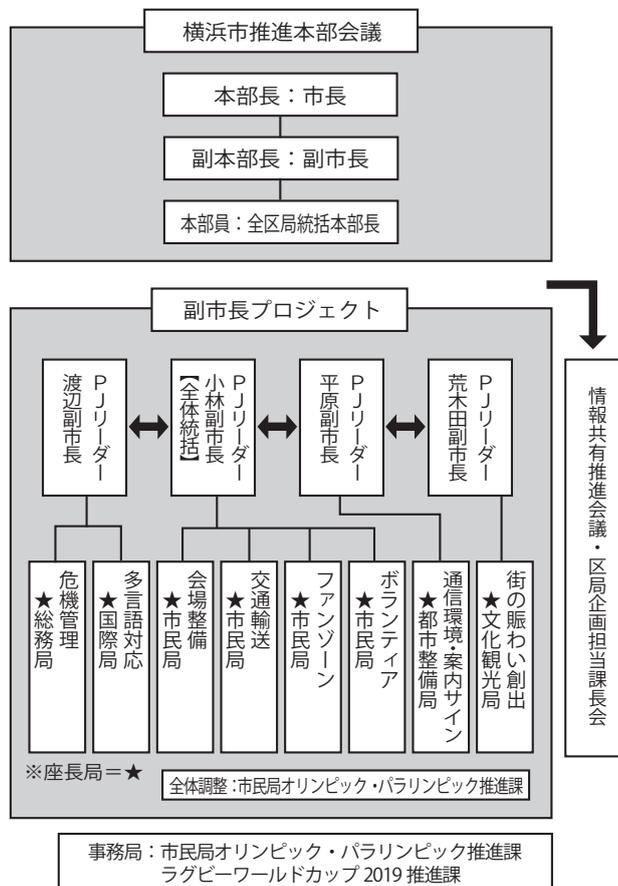
また、そのビジョンに基づく「ラグビーワールドカップ2019™東京2020オリンピック・パラリンピックに向けた横浜市の取組」を策定し、これに基づき各区局が事業を推進した。

副市長プロジェクト所轄事務

(2019年4月時点)

プロジェクト名	所掌事務
会場整備	・会場施設整備基本計画の策定、組織委員会との役割分担に関すること ・その他、両大会に係る会場整備に関すること
通信環境・案内サイン	・通信環境の整備、案内サインの多言語化に関すること ・その他、両大会に係る通信環境、案内サインに関すること
交通輸送	・両大会開催時等における交通・輸送対策の検討、計画の策定等に関すること ・その他両大会に係る交通、輸送に関すること
危機管理	・各種災害対策、救急医療体制、開催期間中の警戒体制等に関すること ・その他、両大会に係る危機管理に関すること
ボランティア	・ボランティアの活用方針や配置計画の策定等に関すること ・その他、両大会に係るボランティアに関すること
ファンゾーン	・ラグビーワールドカップのファンゾーン運営計画書策定等に関すること ・その他、ファンゾーン運営に関すること
多言語対応	・案内サイン、飲食・宿泊等の観光サービス、通訳等ボランティアなど、様々な取組の横断的かつ統一感のある多言語化の推進に関すること
街の賑わい創出	・両大会開催期間中の賑わい創出・経済活性化に関すること ・その他、市内の賑わい創出・経済活性化策に関すること

推進本部組織図 (2019年4月時点)



〈市の官民連携組織〉

◆ラグビーワールドカップ2019™

東京2020オリンピック・パラリンピック

横浜開催推進委員会

ラグビーワールドカップ2019及び東京2020オリンピック・パラリンピックの横浜開催の成功には、行政だけでなく、市内の経済団体や公共交通機関をはじめ、関係機関の協力が不可欠であり、オール横浜でスクラムを組み、取り組んでいく必要があった。

そこで、2016年11月に市長を会長、横浜市会議長、横浜商工会議所会頭、(公財)横浜市体育協会会長を副会長とする、ラグビーワールドカップ2019™東京2020オリンピック・パラリンピック横浜開催推進委員会(以下、横浜開催推進委員会)が官民連携組織として発足した。

この横浜開催推進委員会の設立総会において、「横浜ビジョン」が採決された。

その後、各大会におけるより具体的な検討事項や共有事項を協議するため、2017年7月にラグビーワールドカップ2019™専門委員会及び東京2020オリンピック・パラリンピック専門委員会を創設した。

さらに専門部会として、2018年4月に医療救護検討部会、同年10月に交通輸送検討部会を設立した。

大会を直前に控えた2019年7月には、後述する神奈川県官民連携組織、「ラグビーワールドカップ2019及び東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会神奈川推進会議」と合同で総会を開催し、大会の成功とオール神奈川・横浜の結束を確認した。

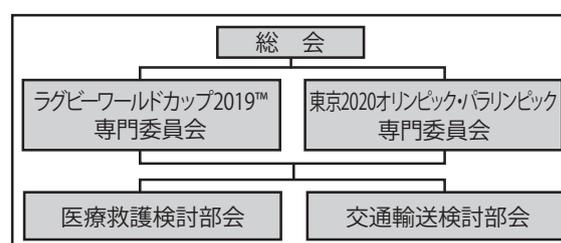


横浜開催推進委員会、ラグビー・オリパラ神奈川応援団合同総会(2019年7月11日)

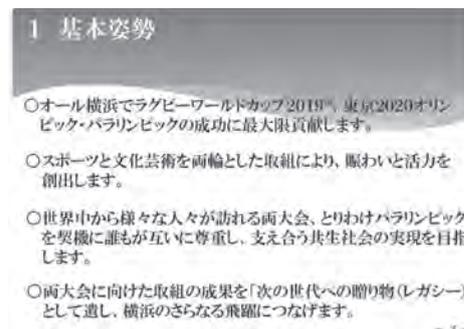
横浜開催推進委員会・構成員

- (1) 会長 横浜市長
- (2) 副会長 横浜市会議長、横浜商工会議所会頭、(公財)横浜市体育協会会長
- (3) 委員 市会、経済団体、交通関係団体、医療機関、スポーツ関係団体、文化関係団体、障害者団体、観光関係団体、神奈川県、神奈川県警察など87団体(2019年7月4日時点)

横浜開催推進委員会構成図



横浜ビジョン(抜粋)



- 2016年 11月 開催推進委員会設立総会 開催
横浜ビジョン策定
- 2017年 7月 「ラグビーワールドカップ2019™
専門委員会」及び「東京2020
オリンピック・パラリンピック
専門委員会」第1回合同委員会
(以下、合同委員会)
- 2018年 3月 第2回合同委員会 開催
医療救護検討部会・交通輸送検討部会
の設置
- 2018年 8月 第3回合同委員会 開催
- 2019年 3月 第4回合同委員会 開催
- 2019年 7月 第2回総会 開催
(ラグビー・オリパラ神奈川応援団と合同開催)

〈 県の庁内推進組織 〉

◆神奈川県ラグビー・オリパラ・スポーツ施策 総合推進本部

ラグビーワールドカップ2019及び東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会(以下、ラグビー・オリパラ)に向けて、2016年5月13日から、各局局長級を本部員とする「神奈川県ラグビー・オリパラ・スポーツ施策総合推進本部」を庁内に設置し、各種取組の情報共有を図った。

◆ラグビーワールドカップ2019™及び東京 2020オリンピック・パラリンピック競技大会 推進かながわアクションプログラム

県は、ラグビー・オリパラの成功に向け、県の取組を計画的に推進するため、大会を迎えるに際しての必要な具体的施策・事業を明らかにする「ラグビーワールドカップ2019及び東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会推進かながわアクションプログラム」を2016年10月に作成し、毎年見直しを行いながら県全体で事業に取り組んだ。

〈 県の官民連携組織 〉

◆ラグビーワールドカップ2019及び 東京2020オリンピック・パラリンピック競技 大会神奈川推進会議

ラグビー・オリパラの成功に向け、オール神奈川で取り組んでいくため、県及び県内市町村、そしてスポーツ団体や公共交通機関、医療機関等関係団体で構成されるラグビーワールドカップ2019及び東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会神奈川推進会議(通称:ラグビーオリパラ神奈川応援団)を2016年10月8日に設立した。

〈 ラグビーワールドカップ2019を成功させる 横浜市議員、神奈川県議会議員による応援組織 〉

大会の成功を目指して、大規模スポーツの大会運営に関する調査・研究や議会・市民・行政が一丸となった大会機運を盛り上げるための取組推進を目的として、横浜市では2015年9月25日に「ラグビーワールドカップ2019を成功させる横浜市議員の会」が、神奈川県では2016年3月24日に「ラグビーワールドカップ2019を成功させる神奈川県議会議員の会」がそれぞれ発足した。

開催都市大会運営本部

概要

本大会においては、競技場内を大会組織委員会が、競技場外を開催都市が担当したが、神奈川・横浜会場での試合開催日に、開催都市が担当する競技場外の交通輸送、警備、医療救護などの業務を、現場近くで迅速に対応することや、業務全体を総括・指揮することを目的に、競技場に程近い「セブン&アイ・ホールディングス伊藤研修センター」に「開催都市大会運営本部（以下、運営本部）」を設置した。

運営本部では、開催都市の各業務を担う班が、現場で活動するスタッフの指揮をとるとともに、関係機関や競技場内の大会組織委員会との調整を行い、業務を進めた。

また、各班活動状況の定時報告、本部会議の開催など情報共有体制を構築したほか、無線やラインワークス（ビジネスチャットツール）の活用により、総括責任者等が開催都市の業務全体をタイムリーに把握するとともに、班同士が緊密に連携することができた。

さらに、「市大会警戒本部」、「医療救護本部」及び「県情報連絡室」と連携し、危機事案の発生に備える体制を構築した。

スケジュール

2018年 7月 運営本部設置場所決定
（セブン&アイ・ホールディングス伊藤研修センター）

2018年10月 「キャノン プレディスローカップ2018」での実施検証

2019年 7月 情報受伝達訓練（図上訓練）実施

2019年 8月 テロ対策合同訓練（実動訓練）実施



セブン&アイ・ホールディングス伊藤研修センター外観



運営本部から見た競技場

内容

運営本部は、総務班、交通輸送警備班、ボランティア班、イベント班、ファンゾーン運営本部、医療救護班、危機管理班の7班から構成された。（ファンゾーン運営本部は臨港パークに設置。）また、大会組織委員会の連絡員が運営本部に常駐するとともに、競技場内にも開催都市の連絡員を置き、競技場内外が連携できる体制とした。

運営本部においては、県・市職員、ボランティア、警備員、医師、看護師など様々な人たちが活動し、従事者は800人強（1日あたり）であった。これに加え、市大会警戒本部、消防特別警備本部、医療救護本部などでも職員などが従事し、開催都市全体では約2,000人（1日あたり）が活動した。

運営本部では、各班内での活動現場との連絡、班を越えた情報伝達手段として、IP無線や携帯電話の通話に加え、携帯電話（スマートフォン）やパソコンで確認できるラインワークスを活用した。

即時の情報共有や急を要する連絡はIP無線、文字情報や写真の共有はラインワークスというかたちで、状況に合わせてうまく活用することで、現場状況をリアルタイムで広く共有することができた。

また、ラストマイル上に複数設置した警備カメラ等の映像を視聴するモニターを本部内に設置し、総括責任者をはじめ全班がリアルタイムに現場の映像を把握することができた。



ラインワークスの画面



運営本部の様子（警備カメラのモニターなど）

IP無線やラインワークスでの情報共有に加え、各班は本部運営開始から1時間半ごとに主な活動状況をまとめ、総務班を通じて、総括責任者などに報告を行う（定時報告）とともに、必要に応じて臨時的報告を行った（臨時報告）。

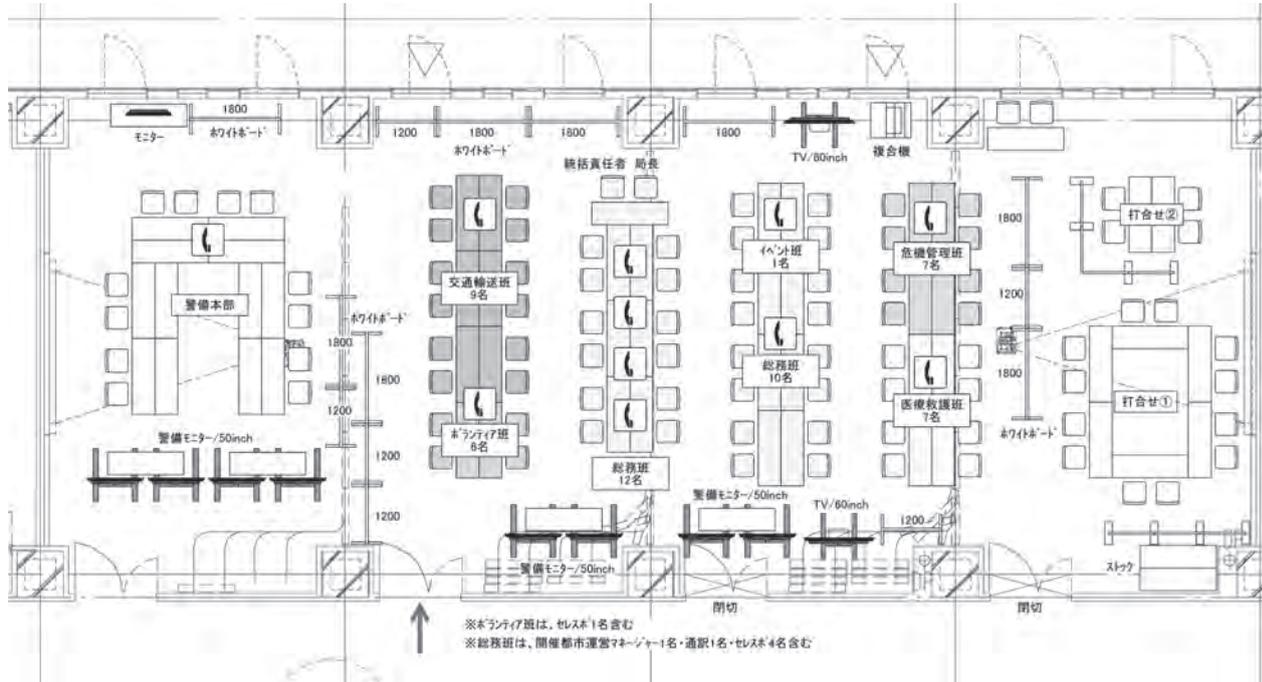
試合日別の開催都市取組結果

試合開催日	9月21日	9月22日	10月12日	10月13日	10月26日	10月27日	11月2日
試合時間	18:45~20:34	16:47~18:47	17:15開始予定	19:47~21:42	17:03~18:59	18:03~19:51	18:02~19:54
対戦国	ニュージーランド対南アフリカ	アイルランド対スコットランド	イングランド対フランス	日本対スコットランド	イングランド対ニュージーランド	ウェールズ対南アフリカ	イングランド対南アフリカ
試合結果	23-13	27-3		28-21	19-7	16-19	12-32
入場者数	63,649人	63,731人		67,666人	68,843人	67,750人	70,103人
運営体制							
職員	1,210人 (うち開催都市大会 運営本部95人)	1,167人 (うち開催都市大会 運営本部84人)		1,058人 (うち開催都市大会 運営本部66人)	1,184人 (うち開催都市大会 運営本部86人)	1,181人 (うち開催都市大会 運営本部85人)	1,237人 (うち開催都市大会 運営本部85人)
ボランティア							
競技場周辺	155人	171人		135人	166人	155人	191人
ファンゾーン	214人	199人		-(台風で中止)	184人	197人	209人
警備スタッフ (警備員、スチュワード)							
競技場周辺	201人 (うち警備員123人)	201人 (うち警備員123人)		201人 (うち警備員123人)	201人 (うち警備員123人)	201人 (うち警備員123人)	201人 (うち警備員123人)
ファンゾーン	60人 (うち警備員50人)	60人 (うち警備員50人)		警備員10人 (台風中止対応)	60人 (うち警備員50人)	60人 (うち警備員50人)	60人 (うち警備員50人)
医療スタッフ (医師、看護師、病院事務員)	7人	7人		7人	7人	7人	7人
その他 (横浜ラグビーフェスタ市大ボ ランティア、消防団、清掃ボラ)	184人 (うち消防団14人、 清掃ボラ170人)	16人 (うち消防団16人)		17人 (うち消防団17人)	23人 (うち市大ボラ7人、 清掃ボラ16人)	20人 (うち市大ボラ4人、 清掃ボラ16人)	57人 (うち市大ボラ5人、 清掃ボラ52人)
ツイッターでの広報	57件	65件		30件	48件	50件	42件
ごみの回収量	59.8kg	389kg	123.4kg	144.5kg	188kg	169kg	228.5kg
仮設トイレの使用量	200L	300L		-	500L		400L
臨時タクシー乗降所							
降車	152人	86人		79人	154人	148人	211人
乗車	48人	76人		146人	165人	154人	261人
退場時待機列	待機列最大約120人	待機列最大約30人		待機列最大約100人	待機列最大約100人	待機列最大約60人	待機列最大約80人
OTAシャトルバス							
利用者数(往路)	1,636人	1,511人		1,024人	4,384人	2,895人	2,660人
運行本数(往路)	53本	51本		33本	122本	110本	108本
利用者数(復路)	1,511人	1,479人		994人	4,116人	2,772人	2,629人
運行本数(復路)	45本	50本		30本	119本	79本	84本
交通規制の実施							
浜島橋交差点(車両通行不可)	15:45~18:45	13:38~16:33		16:25~19:25	13:45~16:40	14:50~17:45	14:30~17:40
小机地域(車両通行不可)往路	15:45~18:45	13:59~16:47		17:10~19:33	14:10~16:45	15:25~17:45	15:30~17:40
小机地域(車両通行不可)復路	20:10~21:50	17:53~20:03		21:40~23:00	19:00~20:20	19:50~21:10	20:00~21:35
第一駐車場入口付近(駐停車禁止)	15:53~22:20	12:20~20:19		14:35~23:40	11:55~20:25	13:20~21:40	12:30~22:10
案内デスク利用件数							
新横浜	80件	60件		35件	50件	35件	42件
小机	32件	21件		15件	16件	28件	23件
手荷物預かり所利用件数							
新横浜	161件	293件		台風の影響で設置なし	228件	228件	171件
小机	55件	65件		台風の影響で設置なし	14件	17件	12件
救護所等利用件数							
場内	11件	14件		15件	13件	10件	9件
場外	0件	0件		台風の影響で設置なし	0件	0件	0件
派遣型医療チーム	0件	0件		0件	0件	0件	0件
救急搬送件数							
場内	1件	0件		2件	1件	1件	4件
場外	0件	1件		0件	0件	1件	2件
周辺イベント来場者数							
横浜ラグビーフェスタ (新横浜駅北口西広場)	約8,000人	約7,500人		台風のため中止	約2万人	約2万人	約2万人
小机マルシェ	約900人	約800人		台風のため中止	約1,000人	約1,200人	実施なし

※案内デスクは、新横浜駅、小机駅のみ記載。そのほか、ファンゾーン最寄り駅である横浜駅、桜木町駅、みなとみらい駅で実施。

※OTA：Official Travel Agency（公式旅行代理店）

運営本部のレイアウト



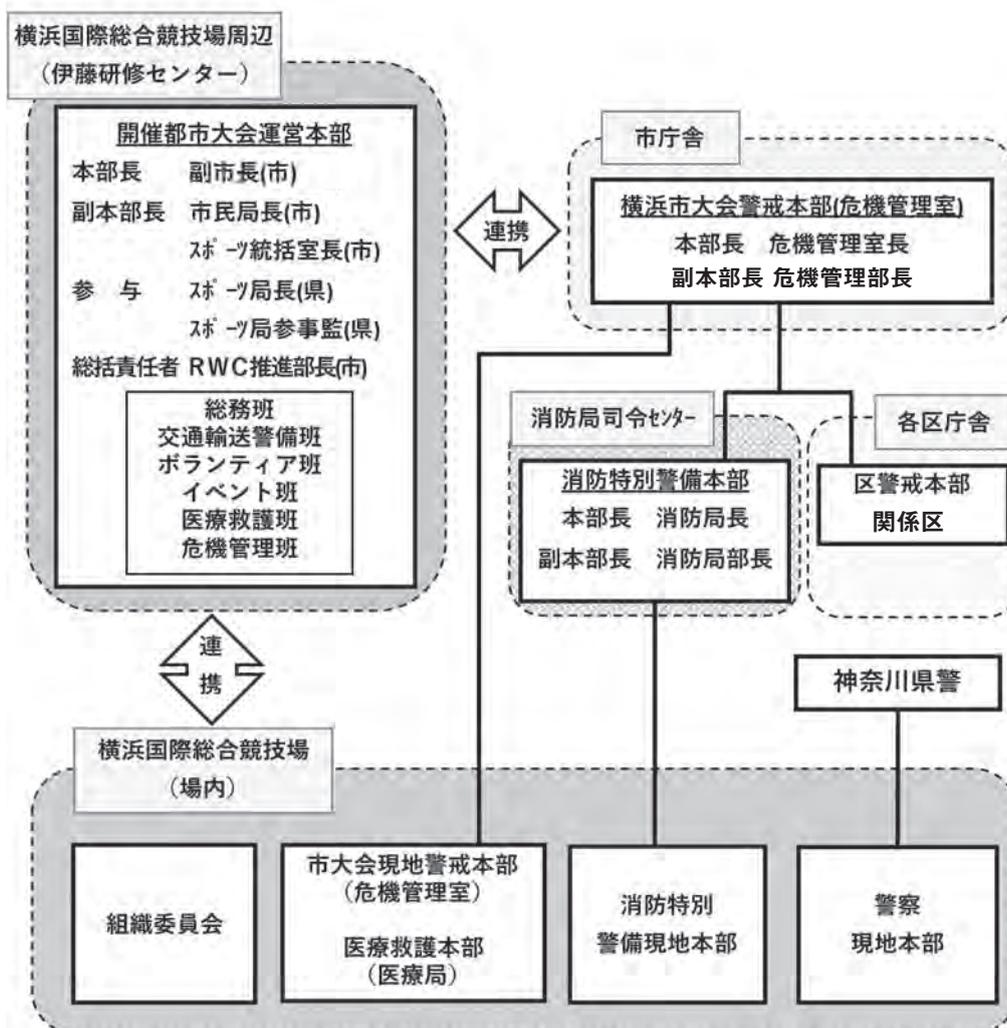
試合開催日の運営スケジュール

時間	主な動き	報告、本部会議
KO-6時間	開催都市大会運営本部運営開始 競技場内プレマッチブリーフィング	定時報告 第1報
KO-5時間30分		本部会議
KO-5時間	ボランティア集合	
KO-4時間30分		定時報告 第2報
KO-3時間30分	ボランティア入場時配置 案内デスク(新横浜、小机)運営開始 手荷物預かり所運営開始	
KO-3時間	ゲートオープン 場外救護所運営開始	定時報告 第3報
KO-1時間30分		定時報告 第4報
試合開始 (KO)		定時報告 第5報
KO+15分	場外救護所運営終了	
KO+30分	案内デスク(新横浜、小机)運営終了	本部会議
FW-30分	ボランティア退場時配置	
FW-15分		定時報告 第6報
試合終了 (FW) ※KO+1時間45分で計画		
FW+1時間15分	ボランティア活動終了	定時報告 第7報
FW+1時間30分	ゲートクローズ 手荷物預かり所運営終了	
FW+2時間30分	本部運営終了	

※実際の時間は、試合開催日により前後した。
 ※総括責任者が運営本部で総括・指揮する時間を本部運営時間としたが、班によっては、本部運営時間前後にも活動を行っていた。
 ※KO:キックオフ(試合開始) FW:ファイナルホイッスル(試合終了)

開催都市組織体制の全体イメージ図（試合開催日）

※危機事案発生時には、危機管理体制へ移行する。



大会を振り返って

綿密な準備と訓練を通して、本部内外の全員が高い意識をもって連携しながら業務にあたった結果、開催都市として想定通りの働きをすることができた。ラインワークスや無線などによる情報が運営本部内の全員に共有され、それを元にした定時報告や随時報告によって、常に的確な判断ができたことも成果のひとつである。

台風通過により試合開催可否が検討されていた10月13日朝も、会場周辺の安全確認、鉄道の運行状況などを調査し、組織委員会に情報提供を行うなど、アクシデントに対しても冷静な判断や行動ができた。



決勝戦終了後の大会運営本部の様子

開催都市組織体制図



【 台風19号への対応 】

10月10日 —台風19号の接近—

日本代表は9月20日の開幕戦から3連勝と、快進撃を続けており、10月13日のプール戦最後のスコットランド戦に向けて日本中が大きく盛り上がっていた。

一方、非常に強い台風19号が日本列島に接近しており、10月12日から13日にかけて日本に上陸、通過することが予測されており、試合の開催が危ぶまれていた。

10月10日、大会組織委員会は10月12日に開催される、神奈川・横浜会場のイングランド対フランスを含む2試合について、開催中止を決定。また、10月13日の試合については、台風通過後の安全性を調査の上、試合開催可否を判断し、試合開始6時間前までに観戦客へ案内することが決まった。神奈川県・横浜市も、10月12日、13日のファンゾーン及びおもてなしイベント(横浜ラグビーフェスタ2019、こづくえマルシェ)の中止を発表した。



共同通信社提供

10月11日 —撤収作業を進める—

県・市は、ファンゾーンの仮施設の撤去を進め、大型モニターや大型テントも、想定を超える強風に備え、撤去することとした。

さらに、県内・市内の大型モニュメント『Big Try』やバナーフラッグ、横断幕などの都市装飾、公認チームキャンプ地の仮施設等についても撤去を進め、11日までに対応を完了した。並行して、ホームページ及びSNSなどでも、開催中止等の情報発信を行った。



ファンゾーンの撤収作業進む

10月12日 —台風上陸—

10月13日の試合については大会組織委員会で他会場での開催も含め、様々な検討がされており、試合6時間前までに試合開催可否の判断をすることとなった。

10月12日、県・市は、翌日の試合開催に向け、開催都市大会運営本部に前日から職員12名が待機、さらに試合会場の施設・設備の復旧のため、市環境創造局職員4名及び指定管理者である横浜市体育協会職員20名が競技場内に待機し、翌日の対応に備えた。

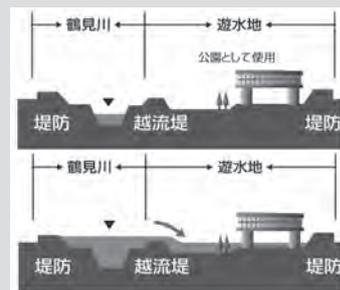
試合会場である横浜国際総合競技場のある新横浜公園は、多目的遊水地としての機能を持っており、鶴見川の水位が上昇した場合に競技場下部を含む公園内に水が流入し、氾濫を防ぐ役割がある。

台風19号による大雨のため、8時50分には公園内への流入が開始、16時55分には競技場下部の駐車場にも水が流入した。これにより、流域の安全が保たれた。

そして18時ごろ、台風19号は本州に上陸、神奈川県も暴風域に入り、横浜では10月としては過去最大となる最大瞬間風速43.8メートルを記録した。21時ごろ、台風は神奈川県を通過した。



新横浜駅のサイネージで試合中止を表示



新横浜公園は鶴見川の遊水地としての機能を持つ



台風上陸、横浜も暴風域に

10月13日 —試合開催決定までの動き—

●開催都市運営本部の動き

夜が明けて、朝6時、開催都市運営本部に詰めていた職員は試合会場周辺を巡回して被害状況を確認、特段被害は見られなかった。さらに、公共交通機関や県内・市内の被害状況を確認、大会組織委員会と情報共有を行った。

そのほか、台風対策のため一時撤去していた資機材等（監視カメラ、案内サインなど）の再設置を行い、開催に向けた準備を実施した。

●競技場内の動き

早朝から、競技場内においては、市環境創造局及び横浜市体育協会は関係事業者と連携し、施設・設備の点検、復旧作業を実施した。

さらに、競技場下部の駐車場については、利用不可を想定し、周辺の駐車場を利用する可能性も検討していたが、想定よりも水が早く引いたことから、利用可能と判断、清掃・消毒作業を行った。

●試合開催決定

10時45分、大会組織委員会は、一部仮設施設の破損は見られるものの、試合開催が可能であると判断、予定通り試合を開催することを決定した。

なお、公共交通機関の乱れに伴うスタッフ不足や、設備の破損等により一部売店が休業となる可能性があったため、この試合に限り、飲料の持ち込みを許可した。

大会組織委員会及び県、市は日本中が注目する日本対スコットランド戦に向けて、準備を進めることとなった。

10月13日 —日本対スコットランド戦開催、決勝トーナメント進出へ—

試合も、日本中が見守る中、日本がスコットランドに28-21で勝利し、初の決勝トーナメント進出を決めた。大会運営についても、試合会場には68,843人が来場し、事故もなく、安全・円滑に行われた。

日本各地で甚大な被害が発生する中で、日本代表の懸念に戦う姿、そしてこの大きな勝利は、被災者をはじめ多くの国民に元気や勇気を与えた、と報じられた。



早朝の新横浜駅周辺の状況



鶴見川の水が流入した新横浜公園



競技場下部の清掃作業進む



28-21、日本代表が死闘を制す

交通輸送

概要

観客並びにチームをはじめとする大会関係者を試合会場まで安全かつ円滑に輸送する業務が交通輸送であり、本大会においては、大会関係者の輸送及び競技場内の観客の案内誘導を大会組織委員会、競技場外の観客の案内誘導を開催都市が担当した。

神奈川県・横浜市は、安全・円滑な観客輸送を行うために、関係機関と議論を重ね、公共交通機関（鉄道等）を中心とする輸送体制の構築、歩行者動線の選定、案内デスクの設置、交通広報などの交通輸送計画を策定した。この計画に基づき、交通関係機関との連携体制の構築やボランティアによる案内誘導、早期来場の呼びかけや交通総量の抑制の広報などを実施した。

スケジュール

2017年12月 大会組織委員会が交通輸送

ガイドライン提示

2018年 3月 交通輸送基本計画策定

2018年10月 交通輸送検討部会設置

交通輸送実施計画素案作成

「キヤノン プレディスローカップ

2018」での実施・検証

2019年 3月 交通輸送実施計画策定

2019年 8月 交通広報開始

基本計画の策定

12開催都市の試合会場はそれぞれ交通環境が異なる一方で、一定のサービスレベルを確保する必要がある。そこで大会組織委員会は、各開催都市における交通計画の検討の基礎として、安心・安全を第一とした輸送や各開催都市のサービス水準の確保を目的とした「交通輸送ガイドライン」を12開催都市に提示した。

ガイドラインは、大会組織委員会と開催都市の役割分担や輸送計画策定の手順、計画に含むべき事項の方針をまとめたものとなっており、このガイドラインに基づいて交通輸送基本計画の策定に着手した。

基本方針の設定

横浜国際総合競技場の周辺は、3線5駅の鉄道路線と3系統1停留所のバス路線が整備されており、最寄り駅から会場まで徒歩でのアクセスが可能な公共交通の利便性に優れた立地環境にある。

交通輸送基本計画の策定にあたっては、公共交通機関を利用して観客を円滑に輸送できるかを確認するため、過去の大規模スポーツイベントの実績調査や会場周辺道路及び会場最寄り駅の基本情報整理を行った。

また、2017年11月に同競技場で行われた「リポビタンDチャレンジカップ2017日本代表対オーストラリア代表」などのイベント開催時に実態調査などの基礎調査を実施し、調査結果に本大会の行程や来場者属性を反映させて来場者推計を行った。

これらに基づき、以下の3点を基本方針とした。

(1) 安全かつ円滑な輸送・誘導の実現

適切な徒歩ルートの設定や安全確保のための交通規制の検討と、事前広報を徹底する。

(2) 公共交通機関(鉄道等)を中心とする輸送体制の構築

観客の輸送については、競技場周辺の5駅を中心とした公共交通機関での輸送を基本とする。

(3) 大会関係者輸送との整合

大会関係者の輸送を担う大会組織委員会と緊密に連携し、大会組織委員会作成の大会関係者輸送計画との整合を図る。

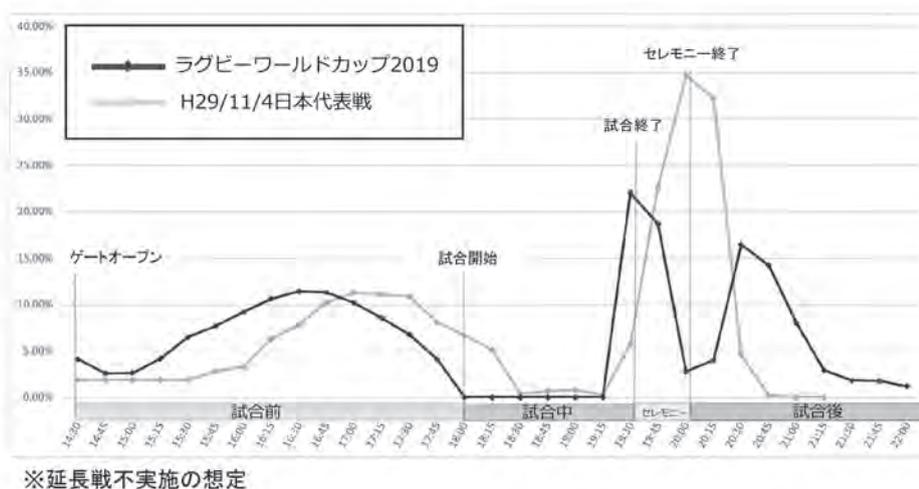
この基本方針のもと、輸送手段別対策、観客誘導・交通広報等の対策を行った。

輸送手段別分担率予想、時間帯ごとの入退場者数予想（決勝トーナメント）

■決勝トーナメント（観客編成：日本人84% 訪日外国人16%）

	往路			復路	
	アクセス手段	分担率	人数	分担率	人数
徒歩・鉄道利用者	徒歩移動者	0.97%	681	0.98%	684
	新幹線（新横浜駅）	12.38%	8,666	10.88%	7,614
	横浜線（新横浜駅）	34.35%	24,043	35.44%	24,808
	横浜線（小机駅）	27.34%	19,139	28.09%	19,663
	市営地下鉄（新横浜駅）	9.98%	6,987	10.03%	7,019
	市営地下鉄（北新横浜駅）	0.48%	333	0.48%	335
バス等	タクシー利用者	1.80%	1,260	1.55%	1,085
	路線バス利用者	0.96%	675	0.82%	576
	二輪車利用者	0.99%	690	0.99%	690
ツアーバス	OTAツアーバス利用者	6.47%	4,527	6.47%	4,527
	STHツアー参加者 （4,500名／台数未定）	4.29%	3,000	4.29%	3,000
	計	100%	70,000	100.0%	70,000

	国籍内訳		
	往路	復路	
徒歩・鉄道利用者	日本人	54,929	55,203
	訪日外国人	4,919	4,919
バス等	日本人	1,001	826
	訪日外国人	259	259
	日本人	1,365	1,266
ツアーバス	訪日外国人	3,622	3,622
	日本人	905	905
	訪日外国人	2,400	2,400
	日本人	600	600
	計	70,000	70,000



輸送手段別対策

鉄道輸送については、基礎調査の結果やほかのイベントにおける増便実績を踏まえ、同競技場におけるイベント時と同程度の増便を各鉄道会社に依頼する一方、いずれの試合開催日も試合終了時刻から終電時刻までに主要駅までの移動が可能であることから、終電延長は実施しないこととした。

路線バスの増便、終車延長についても鉄道と同様の対応とした。

大会組織委員会が実施する国内外の公式旅行代理

店（OTA）による貸切ツアーバス利用客の対応については、決勝トーナメントでは最大6,000人の利用が想定され、これらのバスを競技場周辺で一度に収容することは困難であることから、みなとみらい地区の耐震バス・山内埠頭でシャトルバスに乗り換えてもらい、競技場周辺へ輸送することとした。

このシャトルバス延べ200台の競技場周辺での乗降場所を、臨時の交通規制を実施して新横浜元石川線第1通行帯に設定したほか、待機列の整理方法などの検討を行った。

このほか、競技場周辺にタクシー乗降場所を設定し、関連事業者に配車の増強を依頼した。

徒歩移動

徒歩移動について、観戦客を約7万人と想定し、徒歩または公共交通機関利用者がその約85%、そのうち新横浜駅からの来場者が約70%、小机駅と北新横浜駅からの来場者が約30%と想定し、他のイベントにおける歩行者動線やゲート位置を踏まえ、来場・退場の動線の選定を行った。

この動線に沿って円滑に観客を輸送するため、警備員を交差点や混雑予想が所などに配置して雑踏整理を行うとともに、ボランティアを最寄り駅周辺や主要交差点、各ゲートへの分岐点等の歩行者動線上に配置し、プラカードなどのサイン（日本語、英語の2か国語標記）による案内・誘導を実施することとした。

さらに、駅構内の案内については、各鉄道会社による案内に加え、最寄り駅や主要駅5駅6か所に、案内デスクを設置し、ボランティアによる案内やチラシの配布などを行うこととした。

2018年10月に開催された「キャノン ブレディス ローカップ2018」においては、ボランティアによる案内・誘導、案内デスクの設置・運営を試行実施して検証を行い、大会本番に向けてボランティア配置や案内デスクの体制等の見直しを図った。

大会開幕後は、計画に則り案内誘導を実施する一方で、混雑が生じた場合には観客の流動に合わせて警備本部と連動した迂回動線への案内を行った。また、試合開催日ごとに検証を行い、その結果をボランティアに随時共有するとともに、臨機応変な配置変更を行い、安全・円滑な誘導に加え、おもてなしとしての案内・誘導を実施した。

入場時のボランティアの配置場所



警備員やボランティアは各エリアに分かれて案内・誘導を行った



競技場へ向かう観客（新横浜駅前）



競技場へ向かう観客（横浜労災病院前）

案内デスクの設置状況

設置駅	設置場所	期間	運営体制	業務内容
JR新横浜駅	交通広場2階	試合開催日	ディレクター:1人 ボランティア:6人	<ul style="list-style-type: none"> ・大会会場までの交通経路の案内 ・駅構内の案内誘導 ・大会PR (パンフレット配布、イベント開催状況等) ・観光案内 ・上記についての英語での案内
JR小机駅	駅舎改札外		ディレクター:1人 ボランティア:4人	
JR横浜駅	中央通路	試合開催日 (ファンゾーン 開催日)	ディレクター:1人 ボランティア:8人	<ul style="list-style-type: none"> ・大会会場、ファンゾーンまでの交通経路の案内 ・駅構内の案内誘導 ・大会PR (パンフレット配布、イベント開催状況等) ・観光案内 ・上記についての英語での案内
	そごう前		ディレクター:1人 ボランティア:4人	
JR桜木町駅	西口駅前広場		ディレクター:1人 ボランティア:4人	
みなとみらい線 みなとみらい駅	駅舎改札外		ディレクター:1人 ボランティア:4人	



横浜駅そごう前



桜木町駅西口駅前広場



みなとみらい駅改札外

広報活動

ラグビーワールドカップ2019は、国際的に注目の集まる大会であることから、多くの関係者車両の来場が予想され、競技場周辺の交通需要の増大が見込まれた。そのため、試合開催日の競技場周辺の交通渋滞緩和のために、2019年9月上旬から、事業者や市民に対して競技場周辺での交通規制や迂回への理解と協力、不要不急の自動車利用の抑制を呼びかけた。

その広報活動は、地域の公共施設や鉄道駅などに、ポスターの掲出(約1,000枚)、チラシの配布(約25,000枚)を行うとともに、競技場へ通じる主要交差点など10か所への横断幕の掲出、県警情報板、道路管理者、首都高速道路、NEXCO東日本管内の有料道路の情報板の活用、ホームページ(横浜ラグビー情報)やSNS(ツイッター)、そして市の保有媒体や、庁外関係団体が参加する会議や地元町内会への情報提供など、様々な方法で行った。

また、試合当日には、ホームページやツイッターなどを通じて、早期来場の呼びかけや、入場ゲート付近の混雑を防ぐために持ち込み禁止物の注意喚起などを行った。

緊急対策

天候や事故などにより、交通機関に乱れが生じた場

合などに備えて、交通輸送における緊急対策は、大会組織委員会、開催都市運営本部危機管理班、警備指揮所と連携して行うこととし、具体的な対応フローを検討した。

緊急時には現場スタッフ及び関係機関などから情報を収集し、交通輸送警備班へ集約するとともに、あらかじめ構築した連絡体制のもとで、鉄道会社や道路管理者など関係機関と調整の上、観客の案内・誘導に対応することとした。

大会を振り返って

周辺の交通事業者をはじめとする関係機関と事前調整を重ね緊密な関係が築けていたことで、スムーズな観客輸送が実現できた。台風通過により試合開催可否が検討されていた10月13日朝も、鉄道の運行状況や道路の復旧状況などの情報を、いち早く提供いただき、無事に試合が開催された。

案内・誘導においては、ボランティアにモチベーション高く活動いただけたことにより、観客を安全に競技場まで輸送することができたほか、笑顔溢れるおもてなしにより、大会をより一層盛り上げることができた。

準備段階からご協力をいただいた交通関係機関、取組にご理解をいただいた周辺住民や施設、現場で活躍するボランティアなど、各関係者が連携し、ともに作り上げた良い大会となった。

大会警備

概要

ラグビーワールドカップ2019はアジア初、かつ、ラグビー伝統国以外がホスト国を務める初めての大会であったことから、世界的注目度も高く、海外からのインバウンドをはじめ、多くの要人の来訪など、様々なリスク要因が予想された。

そのため、前年に行われたテストイベントの結果を踏まえた警備計画を策定し、警備スタッフ・ボランティアの適切な配置による警備を実施した。

スケジュール

2018年 4月 大会組織委員会が警備基本方針・警備ガイドライン等提示

2018年 7月 警備計画策定開始

2018年10月 「キャノン ブレディスローカップ2018」での検証

2019年 3月 警備基本計画策定

2019年 9月 警備実施計画策定

計画策定

本大会は、競技場の収容人数や周辺の交通環境など、前提条件の異なる全国12開催都市で開催された。そのため大会組織委員会は、各開催都市における警備

計画の指針・基準となる「警備基本方針」及び「警備ガイドライン」、会場への持込禁止物や禁止行為などを定めた「大会運営管理規程」を策定し、大会警備全体の方向性を確定した。

これら各種方針や計画の策定に当たっては、大会組織委員会、開催都市及び警察など関係機関が一堂に会する警備会議を開催都市ごとに開催し、計画段階から緊密な連携を図った。

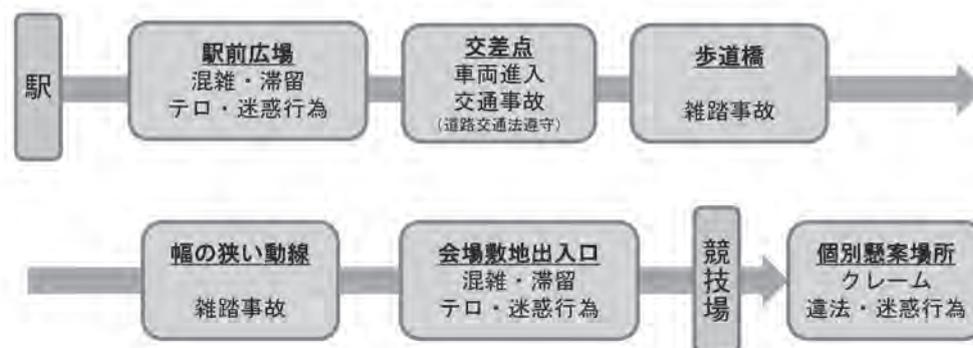
主にラストマイル（最寄りの駅などの交通拠点から競技場までの観客動線）を担当する神奈川県・横浜市

- の警備計画は、
- (1) 観客の安全かつ円滑な誘導
 - (2) 各種事件事故の未然防止
 - (3) 違法駐車・露天商の抑止
 - (4) 関係機関との連携

を警備対策の軸とし、2018年の年度当初から競技場周辺の現場実査及び指針に基づく警備計画の策定を開始した。警察など関係機関との協議を重ね、2019年3月に基本計画（最終稿）、9月に実施計画（最終稿）をまとめた。

また、2018年10月に開催された「キャノン ブレディスローカップ2018」をテストイベントとして位置付け、警備実施状況や無線・カメラ映像の送受信確認を行ったほか、ラストマイル上での分散誘導の必要性などを確認した。

ラストマイル上の主な警備要点



体制

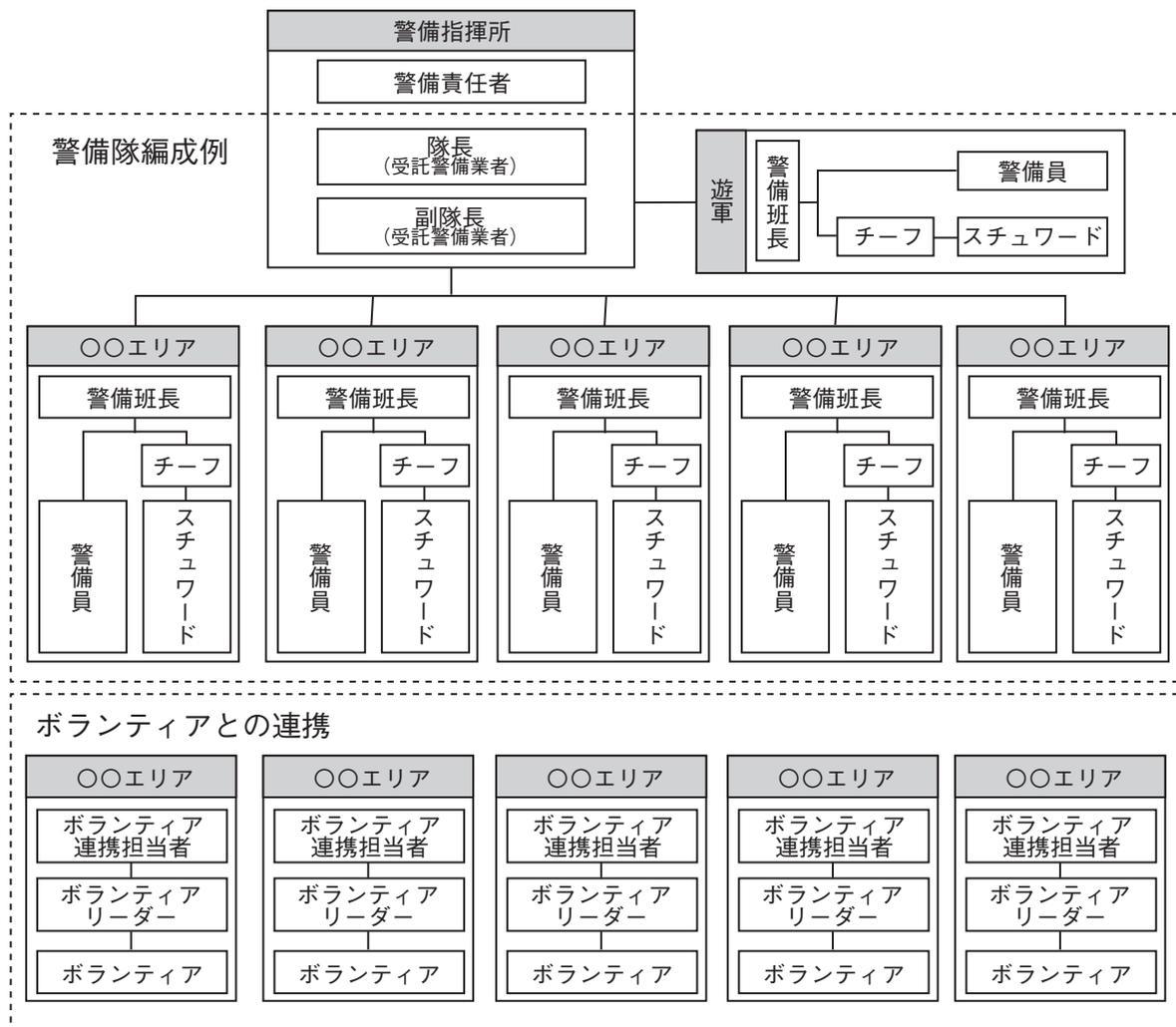
試合開催日は、開催都市大会運営本部内の交通輸送警備班内に警備指揮所を設置し、指揮体制及び警察など関係機関との連絡体制を確立した。また、危機事案をはじめとする突発事案発生時に緊密な連携を図るため、競技場内の大会組織委員会警備指揮所に連絡員（リエゾン）を派遣し、大会運営に関する各種調整及び情報共有を行った。

ラストマイル上には、観客の来場が見込まれる試合開始6時間前から、警備スタッフ（制服警備員約120人、スチュワード約80人）を配置して案内誘導・巡回警備などを実施し、観客等の安全確保を行った。



運営本部 警備指揮所

警備体制図



警備対策

神奈川県・横浜市が実施した主な警備対策は次のとおりである。

〈事前対策〉

試合開催日の早期来場の促進や持込禁止物、交通規制情報などを周知するため、広報担当及び交通輸送担当と連携し、ホームページ（横浜ラグビー情報）、SNS（ツイッター）、ポスター掲出、地元町内会への情報提供などあらゆる機会、媒体を通じて事前広報を行った。

〈当日対策〉

◆アクセスコントロール

競技場の各入場口（関係者入口、チーム入口、観客入場ゲートなど）では、大会組織委員会の警備員による入場資格の厳格な確認が行われた。一方、県・市では、関係車両入口において車両通行駐車許可証（VAPP）の確認を行い、車両に対するアクセスコントロールを実施した。



入場ゲートでのアクセスコントロール

◆案内誘導、雑踏整理

ラストマイル及び競技場アクセスコントロールエリア外に警備スタッフを配置して観客の案内誘導や車両誘導、入場ゲート前の待機列整理などを行い、担当エリアの秩序維持に努めた。



警備員による案内誘導

◆巡回、監視

遊軍警備隊による巡回を強化して不審者・不審物の発見に努めたほか、周辺施設の屋上及び街灯に設置した監視カメラや警備員のウェアラブルカメラのライブ映像を運営本部 警備指揮所に集約し、混雑状況などを監視した。ライブ映像は競技場内の大会組織委員会 警備指揮所にも共有し、各種事案に対する迅速な対応を行った。



警備員による巡回

◆違法駐車、露天商対策

警察と連携し、試合開催日の送迎車両や各種露天商への声掛け・排除などを行い、周辺道路における円滑な交通の確保及びアンブッシュマーケティングの抑止に努めた。



露天商へ声掛けする警察官

◆広報活動

大会運営管理規程で定められた持込禁止物や禁止行為、セキュリティチェックの実施などについて、サイン看板の設置と警備スタッフの現場広報により観客に対する周知を行った。



サイン看板

◆各種資機材の設置

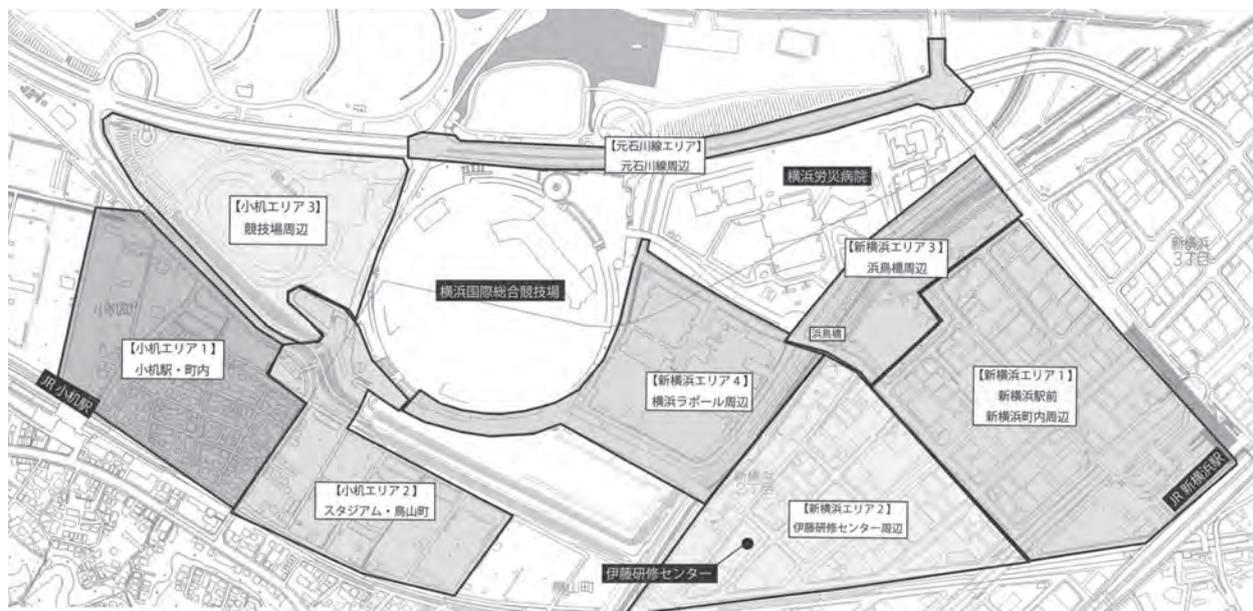
監視カメラのほか、観客滞留場所におけるテロ防止のための車両突入防止柵や、乱横断・違法駐車などの防止のための簡易柵を設置し、観客に対する安全対策や生活動線の確保を行った。

また、観客動線上の暗がりのある場所には仮設照明を設置して適度な明るさを確保した。



車両突入防止柵

警備巡回エリア



実 施

横浜国際総合競技場では、決勝・準決勝を含む6試合が開催され、延べ1,200名の警備スタッフがラストマイルの自主警備に従事した。

競技場周辺では観客の入退場に伴う一時的な混雑や交通渋滞などがあったが、遊軍警備を効果的に運用するとともに、大会組織委員会及び警察と連携して、開場時間の前倒しや混雑の解消を行うなど、迅速・的確に対応した。

また、観客に対する動線案内や注意喚起、各種問合せ対応については、訪日外国人にも配慮し、日本語、英語の2か国語表記やピクトグラム（絵文字・絵言葉）を活用したサイン看板を設置したほか、ボランティアと連携した現場広報を行った。



ボランティアと連携した広報



観客に対する動線誘導

大会を振り返って

本大会の自主警備は大会組織委員会及び開催都市が、会場アクセスコントロールエリア内外で役割を分担して行われた。そのため、オペレーションに関する情報共有や現場レベルでの連携が重要とされたが、計画策定段階から協議を重ねてきたほか、試合開催日には各機関から連絡員（リエゾン）を派遣したことで、大会組織委員会や警察など関係機関と連携した一体的な警備を行うことができた。

また、観客の案内誘導を行う上で重要となるボランティアとの連携については、警備スタッフ（スチュワード）をボランティア連携担当者としたことでオペレーションの変更などがスムーズとなり、安全かつ円滑な誘導につながった。

全試合を通じ、大会に影響を及ぼすような大きなトラブルはなく大会運営を終えることができたが、これは、セキュリティチェックや競技場周辺の交通規制、各種資機材の設置など、観客をはじめ周辺施設、地域住民の理解と協力にも支えられた結果であった。



警察による広報



横断歩道渡し

ボランティア

概要

スポーツボランティアは、大規模スポーツイベントの顔であり、運営を支える重要な存在である。

県・市においては、2002FIFAワールドカップに参加したボランティアが自主的なグループを設立するなど、ボランティア文化が根付いており、横浜マラソンにおいても毎年多くのボランティアが活躍している。

ラグビーワールドカップにおける大会公式ボランティアは、観客を温かいホスピタリティで迎え、ラグビーの価値と開催国の魅力を伝える大会の顔として、各大会で活躍してきた。

ラグビーワールドカップ2019では、日本ラグビーが育んだ「ノーサイドの精神」から、プログラム名を「TEAM NO-SIDE」とし、過去の大会で最大となる全国で約1万3,000人のボランティアが活動した。

県・市としては、本大会の神奈川県・横浜市開催を契機に、ボランティアの育成やボランティア文化の醸成・定着を促進し、翌年開催の東京2020オリンピック・パラリンピックやそのほかのスポーツ大会におけるボランティアの活躍につなげることを目的に、本業務に取り組んだ。

ボランティア業務としては、①募集②採用③研修④運営の順で行い、大会組織委員会と合同で行った。

競技場内の活動を大会組織委員会、競技場外を開催都市が分担し、開催都市が運営するボランティアは主にラストマイルでの案内誘導やファンゾーンでの運営補助の活動を行った。

スケジュール

- 2018年 4月 ボランティア募集開始
- 2018年11月 インタビューロードショー開催
(12月初旬まで)
- 2019年 1月 インタビュー結果通知
ロールオフ
- 2019年 2月 オリエンテーション
- 2019年 2月 eラーニング開始 (同年6月まで)
- 2019年 6月 リーダートレーニング
- 2019年 7月 ロールトレーニング
- 2019年 9月 ベニュートレーニング



ファンゾーンから帰る来場者をハイタッチで見送るボランティア

ボランティア運営の役割分担

	大会組織委員会	開催都市 (神奈川県・横浜市)
運営主体	大会組織委員会と開催都市が合同で一体運営	
活動場所	競技場内、大会関係施設	<ul style="list-style-type: none"> ・競技場周辺 ・最寄駅周辺 ・最寄駅～競技場ルート ・ファンゾーンほか
業務内容	競技運営サポートなど	<ul style="list-style-type: none"> ・案内誘導、観光案内 ・美化推進 ・ファンゾーン運営補助

募 集

ボランティアの募集は大会組織委員会と合同で行われた。

県・市では、広報よこはまをはじめとした各種広報媒体による情報発信や、シティドレッシングの実施、県内でボランティア活動をする団体への呼びかけなど、主に県内における募集広報を行った。

そして、2018年4月から7月まで、大会組織委員会の公式ボランティアサイトでの募集が行われ、神奈川・横浜会場では、募集予定人数約1,500人に対して6,000人を超える応募があった。

〈 ボランティアの募集概要 〉

- 募集期間** 2018年4月23日から7月18日
- 応募要件** 国籍、性別、居住地についての制限はなく、年齢は2019年4月1日現在18歳以上であること。応募は居住地にとらわれず、ボランティア活動可能なエリアへの応募可。神奈川・横浜会場では5日以上活動が可能であることが条件。
- 応募方法** 大会公式ウェブサイトから応募。オンラインでのみ受付。

募集の結果、応募人数が採用予定者を大幅に超えたため、2018年7月下旬に大会組織委員会により抽選が行われ、採用候補者を約1,700人に絞り込んだ。

採 用

2018年11月、12月にこの約1,700人の採用候補者を対象とし、採否を決定する「インタビューロードショー（面接）」を横浜文化体育館にて開催した。

インタビューでは、自己紹介やゲームを織り交ぜたグループワークを通じ、ボランティア活動に必要なコミュニケーション力や大会期間中ともに活動するチームへの順応力について確認を行った。

その後、2019年1月、インタビューロードショーの結果が通知され、約1,500人が大会公式ボランティアとして正式に採用された。

〈 インタビューロードショー 〉

- 日 程** 2018年11月30日、12月1日、12月2日
- 場 所** 横浜文化体育館
- 内 容**
- ①オリエンテーション
ラグビーワールドカップ2019大会概要、ボランティア活動内容の紹介など
 - ②グループワーク
10人程度に分かれて行うゲーム
 - ③スペシャルコンテンツ
ラグビー体験、記念写真撮影、折り鶴制作
 - ④ユニフォームサイズチェック、AD用写真撮影、個別質問

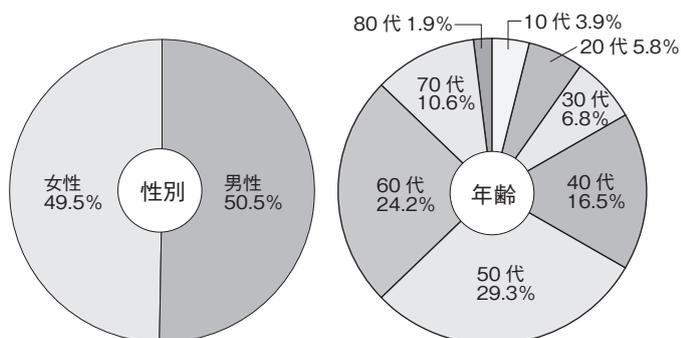


グループワークの様子（インタビューロードショー）

〈 ボランティア構成比 〉

ボランティアの男女比は半々、年齢層は50代が最多の29.3%、次いで60代の24.2%で、10代から80代まで幅広い年代にわたった。

また、ボランティアのうち、約8割は英会話力があると回答していた。



トレーニング(研修)

大会公式ボランティアに必要な知識と、大会の顔としてふさわしいホスピタリティを習得していただくとともに、大会成功への思いを高めていただけるよう、各種トレーニングを実施した。

〈 e-learning 〉

ラグビーワールドカップ2019の概要、大会におけるボランティアの役割、ラグビーの基本的なルールなどを大会組織委員会の公式ボランティアサイトで各自受講。

日 程 2019年2月～6月

〈 オリエンテーション(任意) 〉

ラグビーワールドカップ2019の概要、大会におけるボランティアの役割を確認し、大会成功への思いを高める決起集会。

日 程 2019年2月9日

場 所 関内ホール

参加者 912名



説明を真剣に聞くボランティア(オリエンテーション)

関内ホールでの記念撮影(オリエンテーション)

〈 リーダートレーニング 〉

グループリーダー候補者向けに行われる、リーダーとしての考え方や役割などを身につけるための研修。

日 程 2019年6月7日、8日

場 所 神奈川県トラック総合会館



ボランティアリーダーの役割を学ぶ座学(リーダートレーニング)

リーダートレーニングに参加したボランティアさんの声

2019年6月8日取材



長谷川俊一さん

知らない人と話をすることが好きで、横浜国際総合競技場でボランティアとして活動しています。今回のような国際的なスポーツ大会に参加できることは大きな喜びです。開催日が近づいてくるとともにだんだん気持ちが高まって上がってきました。



小松原佳子さん

これまでも横浜で開催された大きなスポーツ大会でボランティアを経験しています。ラグビーの観客は敵味方関係なく、みんなで試合を楽しむと聞いているので私もその雰囲気と一緒に楽しみたいと思っています。

〈 ロールトレーニング 〉

それぞれ割り当てられた役割（ロール）に応じた活動内容についての講義を受け、活動に必要な知識を身につける役割別研修。

日 程 2019年7月5日～8日
場 所 セブン&アイ・ホールディングス伊藤研修センター



活動するエリアや役割を学ぶ（ロールトレーニング）



初対面の人と会話をする練習（ロールトレーニング）

〈 ベニユートレーニング（実地研修） 〉

実際に活動する場所（ベニユ）を歩き、大会当日の活動をイメージする研修。

◆横浜駅・桜木町駅・みなとみらい駅・ファンゾーン周辺エリア

日 程 2019年9月7日～9日
※9月8日は、台風の影響で中止

◆新横浜駅・小机駅・競技場周辺エリア

日 程 2019年9月14日～16日



活動場所を歩いて確認する（ベニユートレーニング）

ロールトレーニングに参加したボランティアさんの声

2019年7月7日取材



安藤岳彦さん

障害者施設に勤務していてパラリンピックに関わる予定なので、大会の運営や雰囲気を知りたいと思って参加しました。以前はラグビーに関心はなかったのですが、最近ラグビーという言葉や文字にすぐに反応してしまいます。



岸 優佳さん

アメリカに住んでいた中学生の時、英語がわからない私を友達が助けてくれました。この経験から日本語がわからなくて困っている外国人の助けになりたいと思って応募しました。ボランティアは初めてですが、研修を通して活動内容が徐々にわかってきて今はとても楽しみです。



柿鶴真子さん

ボランティアの経験はありますが、スポーツ大会での本格的なボランティアは初めてです。いろいろな人と話するのが好きなので一人で参加しました。外国の方とも話をしたいので今、ラジオで英会話講座を聴くなど、英会話の勉強をしています。ファンゾーンで活動したいですね。

〈エンゲージメント(任意)〉

採用から大会開催までの長期間、大会に向けた思いを高めていただく取組(エンゲージメント)として、大会組織委員会と共同で、IAAF世界リレー2019横浜大会の観戦や、横浜国際総合競技場の観戦ツアーを行った。



IAAF世界リレー2019横浜大会を観戦(エンゲージメント)



見学ツアーで競技場内について説明を受ける(エンゲージメント)

大会公式ユニフォーム

2019年3月に大会組織委員会は、大会公式ユニフォームを公開した。

デザインのコンセプトを「一体感、笑顔、思い出」として、大会の基本カラーである、濃いブルー、サックスブルー、イエローの3色で構成し、ポロシャツにはキービジュアルのグラフィックが施された。

〈ボランティアへの支給品など〉

◆ユニフォーム一式

- ・内容 長袖と半袖のポロシャツやパンツ、ジャケット、キャップ、バックパック、ボトル、ボトルホルダー
- ・ルール 定められたルールに従って着用、保管

◆保険 大会組織委員会によるスポーツ保険に加入

◆食事 活動日に1食分の弁当を支給され、それぞれ活動場所近くの休憩スペースで受け取り

〈ユニフォーム配付(神奈川・横浜会場)〉

神奈川・横浜会場では以下の日程でユニフォームの配付が行われた。

日程 2019年9月7日～9日

場所 国際協力機構 横浜センター (JICA 横浜) 体育館

大会公式ユニフォーム



当日の活動

開催都市のボランティアは、競技場周辺やファンゾーン会場への案内誘導、ファンゾーンでの運営補助が主な役割となる。

〈 競技場周辺での活動 〉

競技場周辺での活動は、ラストマイルの案内誘導と、新横浜駅、小机駅に設置した案内デスクでの案内業務の2つである。

ラストマイルでの案内誘導は、警備員と連携し、プラカードや声掛けによる案内を実施したほか、フォトフレームを持っての写真撮影など、国内外からのお客様へのおもてなしを行った。

ボランティア活動人数実績 (11月2日)

活動エリア	実績人数
新横浜駅周辺	119人
小机駅周辺	32人
競技場周辺	40人
ファンゾーン	209人
計	400人



当日朝のミーティング



案内デスク



ラストマイル上でプラカードを持っての案内誘導



フォトフレームを使った写真撮影は大人気



試合が始まると休憩所で食事



試合終了後のお見送りはハイタッチで

〈 ファンゾーンでの活動 〉

ファンゾーンでの活動は、最寄り駅からファンゾーン会場までの案内誘導と、会場内でのインフォメーションや案内誘導、ブース等の待機列整理などの運営補助、フォトフレームでの写真撮影などのおもてなしを行った。



活動当日のミーティング風景（ファンゾーン）



アンセムの歌詞カードを配る（ファンゾーン）

〈 活動の成果 〉

約8割のボランティアが日常会話レベル以上の英語対応が可能であったことから、外国人に対する英語対応を着実に行うことができた。

神奈川・横浜会場のボランティアによるホスピタリティ溢れる対応は、報道でも非常に高く評価され、大会開幕前に行ったトレーニングの成果や、県・市に根付くボランティア文化のレベルの高さが証明された。

サンキューパーティー

2019年12月21日、大会運営のサポートや観戦客のおもてなしなどで活躍したボランティアに対する感謝を伝えるために、サンキューパーティーを開催した。

サンキューパーティーでは、ラグビー日本代表選手からのメッセージムービーの上映や、感謝状の贈呈、ボランティアの記念撮影などを行い、大会を振り返るとともに、ボランティア同士の交流を深めた。

日 程 2019年12月21日

場 所 新都市ホール

参加者 1,021人

内 容 ムービー視聴、感謝状贈呈、写真撮影



感謝状の贈呈



サンキューパーティーに参加したボランティア全員で記念撮影

大会を振り返って

ボランティアによる大会運営のサポートや観戦客へのおもてなしは、大会が成功したといわれる大きな要因となった。ボランティア活動中の高いモチベーションは、大会開幕前に実施したエンゲージメントの取組のほか、多数の外国人の来場やシティドレッシングなどの国際大会の特別感によって醸成されていた。

本大会において神奈川・横浜会場で活動するボランティアは、案内誘導や笑顔溢れるおもてなしで国内外から訪れた観戦客から高く評価を受けたと報道された。

この成果を大会後のレガシーとして、翌年開催の東京2020オリンピック・パラリンピック、そして、さらなる県・市のボランティア文化の醸成につなげていく。



フォトフレームを使った写真撮影はどこでも大人気だった



ボランティア自身も楽しみながらお見送りのハイタッチ



案内時には英語力を発揮

サンキューパーティーに出席したボランティアさんの声

2019年12月21日取材



山田明子さん

初めてボランティアに参加しましたが、同じチームの方たちがリードしてくださったので、楽しく活動できました。街なかボランティアとしてルート案内が主な仕事で、英語で声掛けをしましたが、外国の方々は片言英語でもきちんと聞いてくれるので、英語に対するハードルが低くなりました。とても良い経験だったので、ボランティア活動を続けます。



田中純子さん

サッカーJリーグの試合でのボランティア経験はありますが、国際大会は初めての体験です。ファンゾーンのゲート付近でパンフレットやアンセムシートを配布したり、桜木町駅周辺でルート案内などをしました。外国の方はとてもフレンドリーで、素晴らしい体験ができました。これから国際大会でのボランティア活動のためにもっと英語を勉強します。



山崎 滋さん

ボランティア歴は2年ほどですが、国際大会に参加したいと応募しました。ファンゾーンを担当しましたが、とても楽しい日々を過ごすことができました。最初は盛り上がるのか心配でしたが、いざ始めると外国人も日本人も一緒に盛り上がり、私も外国人と一緒に写真を撮ったり、片言で話したり。今後もボランティアは続けていきます。

権利保護

概要

ラグビーワールドカップのブランド価値と、開催を支える公式スポンサーの権利を守る権利保護は、大会運営において重要かつ不可欠な要件で、開催都市の協力が開催基本契約によって義務付けられていた。

内容

権利保護は、クリーンと呼ばれる商業的表示のマスクング（遮蔽）とアンブッシュマーケティング（便乗商法）の防止の2つを実施した。

〈クリーン〉

競技場内および競技場周辺500m以内に公式スポンサーの категорияに抵触する広告宣伝物や商業的表示が出ていない状態にすることをいう（看板や道路標識などはクリーンの対象外）。対象エリアにある該当物の調査、大会組織委員会との協議を経て対応を実施。また、市景観調整課と共に路上違反広告物撤去指導も実施した。

クリーン対象外のもの

- ・既存店舗看板（自動販売機、ATMを含む）
- ・大会スポンサーカテゴリーと重複しない広告物
- ・アンブッシュマーケティングの恐れのない広告物
- ・道路標識・駅表示、バス停表示・消火栓
- ・電柱看板・地域の案内地図に表示される企業名

〈アンブッシュマーケティング〉

ダフ屋や偽造商品の販売、公園や路上などでの無許可販売など、観客動線上での大会に便乗した営利活動などを防止することである。

これらを防止するため、事前に周辺の店舗に対して自粛を求めたほか、路上販売禁止サインを掲示するなどの抑制を図った。試合開催日は、大会組織委員会だけでなく、警察や保健所など関係機関と連携してアンブッシュの防止に向けた巡視指導を行った。

また、アンブッシュマーケティング防止の考えに基づき、開催都市が実施するおもてなしイベントについても、一定の制限が設けられた。

アンブッシュマーケティングの典型例

- ・看板、横断幕による広告
- ・サンプル品、雨具などの配布
- ・チラシ、パンフレットの配布
- ・路上での販売行為
- ・車体広告付き車両
- ・ドローンやアドバルーンを使った空中広告
- ・ダフ屋行為・非スポンサーによるイベント

開催都市が実施（主催）するおもてなしイベントの実施基準

	商業活動がないイベント	商業活動があるイベント
500mクリーン内	大会組織委員会が承認すれば実施可	全ての商業活動が実施不可
500mクリーン外かつ動線上	大会組織委員会が承認すれば実施可	大会組織委員会が承認すれば実施可
その他	大会運営上支障がなければ実施可	大会と関連付けない、かつ大会運営上支障はないこと



無許可販売に警告を与える

大会を振り返って

クリーンは、事前のマスクングや掲出自粛要請が効果を発揮したが、アンブッシュマーケティングは、違法販売グループが少人数に分かれて次々に出没したため、大会組織委員会をはじめとするスタッフがチームとなり警察とも連携しながら防止活動を続けた。

警告をしても場所を変えて繰り返されたが、違法販売一つ一つに対して排除や警告、検挙を続けることは、違法販売グループに対する抑制や、今後の国際的スポーツ大会での違法販売の減少に向けて大事なことだと考えられる。

医療救護

概要

ケガや急病、そのほかの医療救護事案発生時に、迅速かつ的確に対処し命を守ることが医療救護の業務である。

そこで、全ての人々の命を守り、安全で円滑な大会運営のために迅速に情報収集と初動対応を行ったうえで、統括的な指揮ができる医療救護体制を構築した。

スケジュール

2018年 4月 医療救護検討部会を設置

2019年 9月 横浜市医療救護計画制定

医療救護体制

〈医療救護本部〉

設置場所 競技場内 317会議室

スタッフ 医師2名、医療局職員2名、業務調整員1名

〈場外救護所〉

設置場所 新横浜駅北口西広場

スタッフ 医師1名、看護師1名

〈派遣型医療チーム〉

待機場所 開催都市大会運営本部

スタッフ 医師1名、看護師1名

〈医療救護班〉

設置場所 開催都市大会運営本部

スタッフ 医療局職員2名



待機中の派遣型医療チーム

内容

ラグビーワールドカップ2019における医療救護業務は、エリアによって役割が分担された。選手及び大会関係者、競技場内の観客については大会組織委員会、ラストマイルや大会関連施設（おもてなしイベント、ファンゾーンなど）に訪れる観客などについては開催都市がそれぞれ担当した。

競技場内には救護室を4か所設置したほか、多数傷病者発生などの危機事案発生時に大会組織委員会や市大会現地警戒本部などと連携し、迅速に対応することを目的として医療救護本部を設置した。

一方、競技場外では新横浜駅北口西広場に場外救護所を設置した。また、横浜市では初めての試みとして、ラストマイルなどで観戦客が負傷または急病などを発症した際に出動し、現場での初期対応などにあたる派遣型医療チームを開催都市大会運営本部内（場外救護所も含む）に配置した。

医療救護検討部会構成メンバー

関係医療機関等
横浜市医師会、横浜市病院協会、横浜市立大学、横浜市立市民病院、済生会横浜市東部病院、けいゆう病院、聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院、昭和大学藤が丘病院、横浜市立みなと赤十字病院、横浜医療センター、横浜南共済病院、横浜労災病院
組織委員会
ラグビーワールドカップ2019組織委員会、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会
横浜市
市民局、総務局、健康福祉局、医療局、医療局病院経営本部、消防局
オブザーバー
神奈川県、神奈川県警察

危機管理

概要

ラグビーワールドカップ2019が横浜市内で開催されるにあたり、想定される危機事案に対する事前対策を推進した。危機事案が発生した場合の被害を最小限にとどめ、安全・安心な大会運営ができるように、開催都市としての責務を果たすため、危機管理体制を確立した。

スケジュール

- 2017年 8月 危機管理プロジェクト設立
- 2018年 3月 危機管理基本計画策定
- 2018年 9月 テロ対策合同訓練
(実働訓練、情報受伝達訓練)
- 2019年 3月 危機管理計画策定
- 2019年 7月 情報受伝達訓練(図上訓練)実施
- 2019年 8月 テロ対策合同訓練
(実働訓練、情報受伝達訓練)実施

体制

試合開催日には、市庁舎危機管理センターに市大会警戒本部を、県くらし安全防災局内に情報連絡室を設置するとともに、競技場内には、市大会現地警戒本部を設置し、消防特別警備現地本部及び医療救護本部と連携した危機管理体制を確立した。また、開催都市大会運営本部に危機管理班を設置し、市大会警戒本部と開催都市大会運営本部との連携を図った。



横浜国際総合競技場317会議室

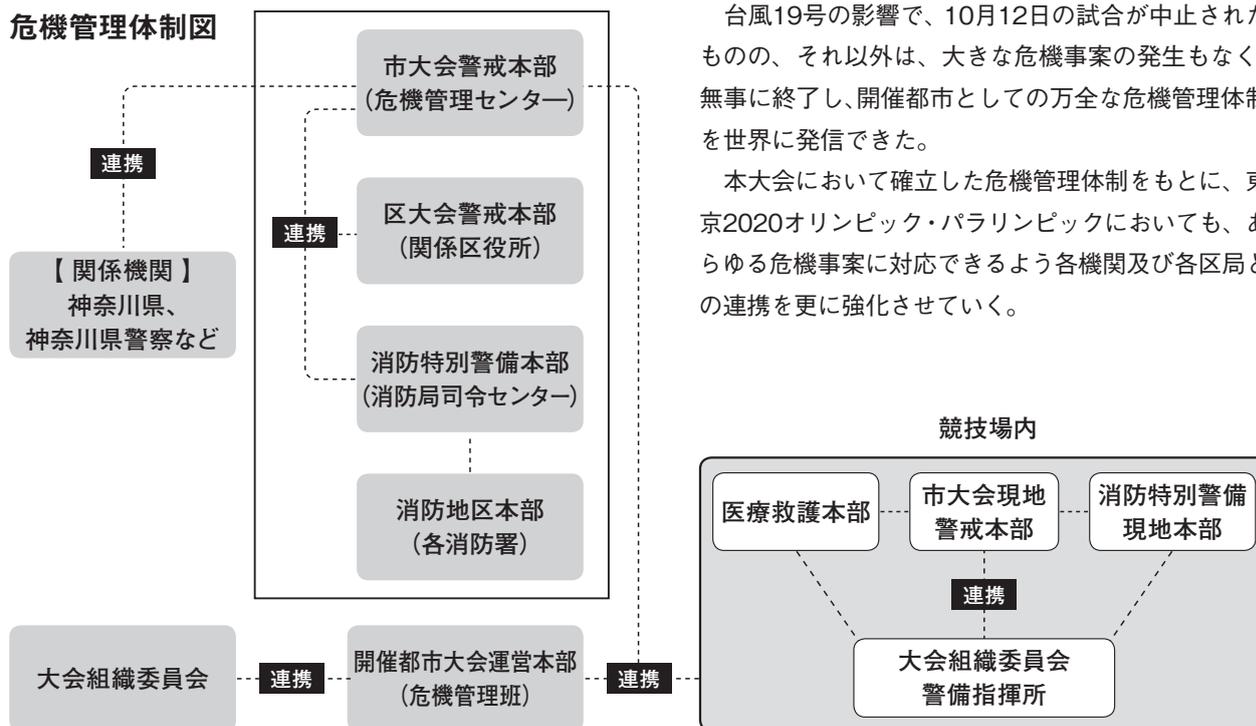
大会を振り返って

危機管理プロジェクトにおいて、ラグビーワールドカップ2019に向けた事前対策や危機管理体制について検討を重ね、万全な体制を確立することができた。

台風19号の影響で、10月12日の試合が中止されたものの、それ以外は、大きな危機事案の発生もなく、無事に終了し、開催都市としての万全な危機管理体制を世界に発信できた。

本大会において確立した危機管理体制をもとに、東京2020オリンピック・パラリンピックにおいても、あらゆる危機事案に対応できるよう各機関及び各区局との連携を更に強化させていく。

危機管理体制図



公衆衛生対策

食品衛生対策

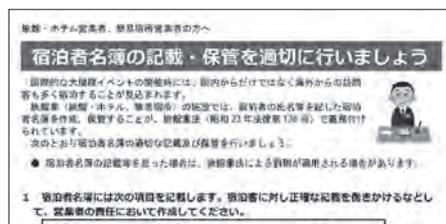
ラグビーワールドカップ2019の開催にあたり、横浜市内の宿泊施設などに多くの観光客が訪れることが予想され、飲食物を原因とする健康被害が発生すると大きな影響を及ぼすことから、事故発生がないよう万全を期す必要があった。そのため、事前対策では区福祉保健センター生活衛生課と市健康福祉局食品衛生課が連携し、2019年4月から8月までを重点期間として、宿泊施設や商業施設内にある食品取扱施設の立入検査を1,713件実施し、食中毒予防対策を推進した。

また、試合開催日には、区福祉保健センター生活衛生課と市健康福祉局食品衛生課で競技場内の売店やケータリング施設、キッチンカーなど食品取扱施設の立入検査を実施したほか、新横浜駅周辺の食品取扱施設の巡回指導を合計266件実施した。さらに、ファンゾーン開催日には、ファンゾーン内の食品取扱施設の立入検査を240件実施することにより、食の安全の確保に努めた。

環境衛生対策

国内外から多くの観戦客が横浜市を訪れることから、競技場やファンゾーンなどのイベント会場、宿泊施設、商業施設の衛生を確保するため、市健康福祉局生活衛生課及び区福祉保健センター生活衛生課で立入検査を312件実施した(2019年4月～9月)。立入検査時には、施設の清掃の衛生管理が適正に行われているか確認するとともに、特に宿泊施設に対しては、旅館業法に基づく宿泊者名簿の作成・保管、外国人宿泊客の旅券(パスポート)の確認・写しの保管を適法に行うよう重点的に指導した。

また、人の持ち物などに付着して持ち込まれるおそれがあるトコジラミの対策について、立入検査時に啓発した。



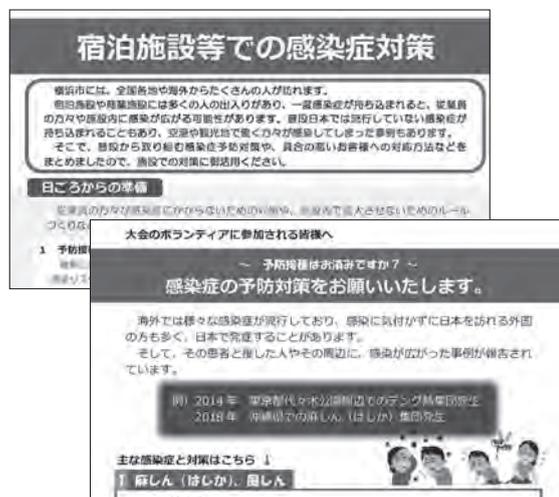
宿泊施設(旅館業)向けチラシ(一部抜粋)

感染症・食中毒対策

市健康福祉局健康安全課では、訪日外国人の増加や観客の集積(マスコギャザリング)による輸入感染症の増加や集団感染事例発生リスクに備え、市民・訪日外国人への注意喚起を行うとともに、大会に関係する宿泊施設などの従事者やボランティアなどに対しワクチン接種などの予防対策に関する啓発を実施した。

また、医療救護体制と連携し、有症状者の早期把握のためデイリーレポートや緊急連絡網などの情報伝達体制を構築した。

さらにデング熱などの蚊媒介感染症対策として市健康福祉局生活衛生課、区福祉保健センター生活衛生課及び衛生研究所と連携し、競技場やファンゾーン及びその周辺において昆虫成長阻害剤による幼虫駆除(2019年6月～9月)を行うとともに、モニタリング地点を増やして蚊の生息状況及びウイルス保有状況調査(2019年5月～10月)を実施した。



感染症予防対策に関するチラシ(一部抜粋)



昆虫成長阻害剤による幼虫駆除

街の美化

国内外から神奈川・横浜を訪れる方々をきれいな街でお迎えし、気持ちよく滞在していただくことを目的に、美化活動に取り組んだ。

神奈川・横浜会場初戦が行われる9月21日には、市資源循環局が清掃ボランティア170人とともにラストマイル（最寄り駅から競技場までの道のり）を清掃するクリーンアップイベントを実施した。

さらに、ラストマイルで活動する大会ボランティアが配置場所への移動時にごみ拾いを行うとともに、試合開催日及び翌日の朝（6時から12時）には、委託事業者による競技場周辺の一斉清掃を実施した。

しかし、試合開始前のラストマイル上の自動販売機付近などには、観戦客が飲食店やコンビニなどの店舗前で飲食したごみが放置されていた。そのため、急遽、試合開始直後から運営本部に従事する職員が放置されたごみを拾い集め、動線上影響がない場所で待機し、市資源循環局港北事務所がごみ回収を行った。

清掃ボランティアによる清掃活動の様子



運営本部従事職員による競技場周辺のごみ拾い



トイレ対策

本大会では、観戦客のビール需要が非常に高いと予想されたため、新横浜駅前公園に仮設トイレを5基設置し、資源循環局北部事務所が定期的なくみ取りを行った。

また、競技場周辺の新横浜駅北口公衆トイレなどの清掃回数を増やしたほか、トイレ内に外国人向け利用マナーの掲示も行った。



設置された仮設トイレ



トイレ利用マナー掲示

会場整備

概要

大会にふさわしい試合開催会場を提供するための会場整備は、県・市の役割分担において、試合会場である横浜国際総合競技場の施設設置者である横浜市が本設・仮設整備を行った。

神奈川・横浜会場である当該競技場は、決勝・準決勝が行われることから、大会組織委員会から特に高度な水準が求められた。

大会組織委員会と締結している開催基本契約では、大会開催の12か月前までに開催都市の費用負担において、会場運営計画及びガイドラインに定める条件を満たした状態に整備することが定められていた。世界3大スポーツイベントの1つとされるラグビーワールドカップが初めてアジアで開催され、世界が注目する大会の決勝を行う会場にふさわしい整備が期待され準備が進められた。

今回の大規模改修では、会場を通常運営しながら短期間で工事を効率的に行うため、建築、電気、機械、造園、土木など技術職が集められ、2017年4月に市環境創造局会場整備課が設置された。

改修は、施設利用に伴う施設管理者との調整、大会のための仮設整備に伴う大会組織委員会との事前調整及び整備時の安全点検など、会場整備課が中心となり緊密なコミュニケーションをとり行われた。

競技場の実績

横浜国際総合競技場は1997年10月に竣工し、2018年に開場20年を迎えた、国内最大規模の収容人数を誇る競技場だ。横浜F・マリノスのホームとして、Jリーグをはじめ、各種スポーツ大会で使用されているが、ラグビーの試合も可能な設計がされており、グラウンドにはゴールポスト用の基礎が用意されている。

2002FIFAワールドカップでは決勝戦の会場となり、今回のラグビーワールドカップ2019でも、決勝を含む6試合（1試合は台風のため中止）が行われた。

同競技場は開場から20年経過していることから、ラグビーワールドカップ2019の試合開催に支障をきたさないために、本大会開催を契機に、大規模な改修が行われた。

業務分担

同競技場内で整備が必要な設備には、恒久的な設備として実施すべきもの（本設工事）、仮設的な設備として設置すれば足りるものの2パターンがあった。

このうち、本設工事については、環境創造局会場整備課が分担し、仮設設備に関しては市民局ラグビーワールドカップ2019推進課が分担した。

なお、仮設設備であっても工事を要するものについては、ラグビーワールドカップ2019推進課が予算を支出し、会場整備課が契約事務などを含め実施した。

また、本設工事については、2020年に同会場で行われる東京2020オリンピックのサッカー競技を見据えて実施した。

整備方針

整備は大会組織委員会が設けた「開催都市ガイドライン」に従って行われた。「開催都市ガイドライン」の中には、横浜国際総合競技場の既存設備でその基準を満たしているもののほか、競技場の寸法（ピッチの大きさ）など整備が必要なものが含まれている。

そのほか、翌年に開催のオリンピックも見据え、施設管理者の立場として安全への配慮や競技場としての価値向上を目指した設備整備も実施した。



開場20年を迎えた横浜国際総合競技場

本設工事

横浜国際総合競技場の恒久的な設備として実施すべきものが本設工事である。その内容は、ハイブリッド芝への張り替え、競技場用照明LED化、音響、スタンド観客席の更新、トイレ施設の更新などがある。



競技用照明LED化工事

〈ハイブリッド芝への張り替え〉

横浜国際総合競技場で開場時から使用しているティフトン芝は、サッカーの試合には問題なく使用できるが、ラグビー競技においてはスクラムなどにより芝に対して大きな踏圧力もかかる上に、大会期間中は短期間で連戦が行われることから芝への負担が懸念され、大会組織委員会からも要望があったことから、強度のあるハイブリッド芝を導入した。

張り替え作業は、2018年6月から1か月間で行われた。

埼玉県東松山市で育てた芝をロール状にして運び、細心の注意を払って張り替えた。ロール状の芝は重量があることから、敷いた後すぐに試合ができる利点があり、運ばれた芝は特殊な機械を用いて設置した。

芝の開発と育成を行う委託事業者選定にあたっては、事業者の創意工夫による提案を受けるため、公募型プロポーザル方式を採用した。事業者からは、大会期間中の連戦にも耐え、これまでの管理作業が継続できる新たな芝の提案を受け、これを採用した。

ラグビーワールドカップ2019の6試合では、最高峰の舞台上で活躍する選手にふさわしい最高のコンディションの芝を提供することができた。



ハイブリッド芝敷設工事

ハイブリッド芝の構造イメージ図



〈 競技用照明LED化 〉

2016年度に設計、2017年度、2018年度の2年間で工事を行った。

競技用照明については、開幕と決勝会場は他会場に比べ、より明るさが求められた。ピッチ上は均一で水平面だけでなく、テレビカメラから見た鉛直面も明るく、まぶしくなく、スローカメラで撮影してもらわず、太陽光に近い見え方などが求められた。

一方、観客席を暗くすることが求められたことから、これらの要求を全て満足でき、大規模な国際大会が開催されているスポーツ施設で実績のあるメーカーのLED照明器具を採用した。

また、1灯ごとに点灯、消灯、調光をプログラムすることが可能で、フィールドを照らす照明としての機能だけでなく、音楽に合わせた演出も可能になり、コンサートなどで舞台と一体になった演出が可能になった。

工事は、競技場を使用しながら行うために観客に影響がないように既存の屋根から鎖で足場を吊る工法を採用した。



LED照明器具



競技用照明のLED化でピッチは明るくなった

〈 音響 〉

音響設備については、事前に観客席やフィールドにおける聞こえ方をシミュレーションし、最適になるようにスピーカーを配置した。

今後、様々な国際大会開催に向けて、競技場としての価値を向上していくことも考慮したうえでの改修となった。

〈 スタンド観客席の更新 〉

スタンド観客席は経年劣化していることもあり、約7万席を更新した。

新しい座席は、前面の通路が確保できるように跳ね上げ式とし、移動もスムーズになった。また、スタンドの2層目は1層目と比べ傾斜が急なので、観戦時に前のめりになっても安全な状態とするように前方座席の背もたれを7cm高くしている。

座席の更新は2017年度から3年かけて行われたが、照明設備の更新と同様に、競技場の運営事業を優先した使用状況に合わせて施工計画し、エリアごとに改修工事が行われた。

また、視野障害となっていたスタンド2層目最前列の柵手すりを改良し、観戦しづらかった約1,000席を解消した。

〈 トイレ施設の更新 〉

これまで、和便器の洋式化を部分的に行ってきたが、今回の工事で、競技場内の観客用、バックヤードのスタッフ用、および東西広場の公衆トイレの全てを洋式化した。

競技場内の多機能トイレでは、男女トイレそれぞれの室内に車いす用のトイレがあるが、今回、異性による介助や性的マイノリティ（LGBT）に配慮し、コンコースから直接入ることができる男女共用のトイレを10室増設した。

外国人をはじめ誰にでも使いやすい、おもてなしのトイレ整備ではほかにも、扉に使用状況がわかるサインを設置し、化粧スペースと動線エリアを分けるなど様々な工夫を行い、混雑緩和を図った。

仮設工事

記者席、実況席、コーチボックス席などは机のサイズ、奥行きや幅は12開催会場共通で、場所と数量は大会組織委員会の要望に合わせて現場で製作し、仮設席として整備を行った。

また、既設記者席（スタンド1層目）は大会ゲスト席に近接しており、観戦しやすい場所であることから仮設の一般席に交換した。ゲスト席の一部には試合で使用するコーチボックス席も設置した。

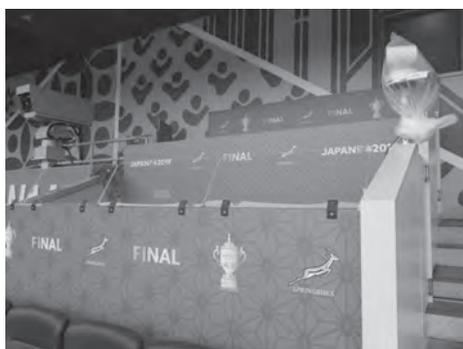
これらのことから、2層目のメインスタンドの一般席1,580席のエリア部分に実況席138席、記者席352席を新しく設けた。

実況席についてはエリアの前段に3人掛けでラジオ用と合わせて計46セットを設置し、机付きの記者席は後段に325席を設けた。記者席が増えた決勝では、記者席・実況席とも満席となった。

また、横浜国際総合競技場のピッチはサッカーの試合を想定したサイズ（107m×72m）だったが、大会仕様は130m×80mのサイズが必要であったため、その仕様を満たすために、フィールドの周辺区域に天然芝による拡張を行った。



仮設記者席



コーチボックス



天然芝敷設工事



拡張されたフィールド全景

ホスピタリティ施設

国賓や、大会公式スポンサーの招待者などを歓待するスペースとして、ホスピタリティ施設を大会組織委員会と連携して仮設設置した。

海外のスポーツスタジアムにはホスピタリティ施設を多数備えている施設が多い。横浜国際総合競技場にも既存のホスピタリティ施設があるが、決勝を行う会場においては主催者の求める水準も高く、12

開催都市の中で特に大規模な施設整備が行われた。

本大会では、①大会オフィシャルゲストラウンジ、②一般用 公式ホスピタリティラウンジ、③商業ホスピタリティラウンジ（大会公式スポンサー）、と3種類のホスピタリティラウンジが、競技場の内外に設置された。

今回のホスピタリティ施設の設置は、こうしたスポーツホスピタリティ文化を日本に広めることにも繋がるものと期待される。



〈大会オフィシャルゲストラウンジ〉

大会主催者が招待する国賓や大会公式スポンサーなどの皆様をおもてなしするためのスペースであり、決勝戦をはじめとする重要な試合が組まれた横浜国際総合競技場には、最大600名程度のゲストに対応するためのスペースが必要とされた。

そのため、既存のVIP用ラウンジを拡張する形で、4階西ゲート前に1,000㎡を超える大型 TENT を仮設設置した。決勝では、さらに招待客が増加することにあわせ、競技場内の室内走路にもラウンジが設けられた。



日本文化を感じる展示品でおもてなし



大会オフィシャルゲストラウンジ内観



決勝のみ設けられた室内走路のラウンジ

〈一般用 公式ホスピタリティラウンジ〉

欧米では既に定着している、試合前後に特別な料理やイベントを用意するなどしておもてなしする観戦スタイル「スポーツホスピタリティ」が今大会で本格的に提供されることとなった。公式プロバイダーであるSTH JAPAN株式会社が販売する公式ホスピタリティプログラムの特設会場として、最大1,500名程度にもなるゲストに対応するため、競技場から徒歩圏内の新横浜駅前公園少年野球場に大型テントが仮設置され、720席程度のイベントスペースと、20名から100名までの人数規模に応じた個室が設けられた。



一般用公式ホスピタリティラウンジ内観



一般用公式ホスピタリティラウンジ外観

〈商業ホスピタリティラウンジ〉

大会公式スポンサーがそれぞれの顧客やその他関係者をご招待するための専用ラウンジであり、最大1,600人程度にもなるゲストに対応するため、競技場内5階西側コンコースを閉鎖する形で、ほぼ全面にラウンジが仮設置された。仮設置ラウンジは、外から中が見えないようしっかり囲われ、コンコースとは思えない重厚な空間となっていた。ラウンジの中にはスポンサー各社がそれぞれに装飾を施した。



商業ホスピタリティラウンジ内観

大会関係者駐車場の確保

本大会において、大会関係者の駐車場の確保については開催都市、運営については大会組織委員会が役割分担し実施した。

最大2,000台を超える大会関係者車両の来場が予想され、競技場付帯の駐車場では不足すること、競技場のある新横浜公園が鶴見川氾濫時の遊水地とさ

れており豪雨などによる遊水地への流入時には、駐車場所の多くを占める競技場1階の人工地盤下駐車場は使用できなくなることが課題であった。

そのため、会場外の周辺駐車場を借り上げたほか、流入時の代替駐車場の確保を進めた。

大会前から期間中にかけて、常時、天候をモニタリングし、遊水地への流入が懸念される場合には、大会組織委員会と連携し、代替駐車場の利用調整を行うなど、万全な体制の確保に努めた。

公認チームキャンプ地

概 要

公認チームキャンプ地は、大会期間中にチームが練習及び調整を行うために滞在する場所で、トレーニング施設と宿泊施設で構成される。

大会組織委員会は、選定プロセスに応募した自治体について審査を行い、チームによる実施視察を経て、公認チームキャンプ地を決定した。

公認チームキャンプ地に決定した自治体は、大会組織委員会が定める条件を満たすようトレーニング施設を整備・維持管理しなければならない。

神奈川県内では、横浜市（アイルランド代表、スコットランド代表）、海老名市（ロシア代表）及び小田原市（オーストラリア代表）が公認チームキャンプ地に決定し、チームの受入れや、チームと市民との地域交流を行った。



スケジュール

2016年12月 大会組織委員会の選定プロセスに応募
(応募数：90自治体、76か所)

※神奈川県内では横浜市、神奈川県・藤沢市、厚木市、海老名市が応募

2018年4月 大会組織委員会 公認チームキャンプ地の内定発表（横浜市及び海老名市）

2019年3月 大会組織委員会 公認チームキャンプ地決定発表（61自治体、55か所）

※オーストラリア代表の事前キャンプ地に決定していた小田原市は、公認チームキャンプ期間もキャンプを実施することとなり追加された



各チームの公認キャンプ地の場所と滞在期間

	滞在チーム	滞在期間	場 所
横浜市	アイルランド代表	9月18日～23日	関東学院大学金沢文庫キャンパスサブグラウンド (練習グラウンド・ジム(仮設))
	スコットランド代表	10月11日～14日	横浜市立大学総合体育館(屋内練習場・プール)
海老名市	ロシア代表	9月25日～10月1日	海老名運動公園(練習グラウンド・ジムその他)
小田原市	オーストラリア代表	9月10日～18日、 10月12日～16日	城山陸上競技場(練習グラウンド)、 ヒルトン小田原リゾート&スパ(ジムその他)

関連プログラム

〈横浜市〉

◆アイルランド代表と

関東学院大学ラグビー部との交流（9月21日）

チームの練習グラウンドがある関東学院大学のラグビー部の学生など約80人が、激励メッセージを寄せ書きしたバナーなどをチームに贈呈。一流選手とのコミュニケーションや一流のプレーを見学する機会が生まれた。

また、チームからは選手全員のサインが入ったジャージや、滞在を証する記念盾の返礼品を贈呈された。2018年ワールドラグビー最優秀選手であるSO ジョナサン・セクストン選手も訪れ、キックを間近で披露した。



アイルランドチームからジャージを受け取る関東学院大学ラグビー部キャプテン



チームから贈呈された記念盾



アイルランド代表と関東学院大学ラグビー部との記念写真

◆金沢区役所・公会堂でパブリックビューイング

プール戦「アイルランド対スコットランド」（9月22日）

プール戦「日本対アイルランド」（9月28日）

プール戦「日本対スコットランド」（10月13日）



◆ラグビークリニック（4月22日）

スコットランド代表ヘッドコーチのグレガー・タウンゼント氏による、横浜市内高校ラグビー部生徒徒約20人を対象としたクリニックを横浜カントリー&アスレティッククラブで実施した。



〈海老名市〉

ロシア代表チームのおもてなしをはじめとして、市民・企業・関係団体と連携し、ALL海老名で盛り上げを図るため「えびなラグビーサポーター」を募集、総勢395名の応募があり、5月26日に結団式を実施。

◆ロシア代表歓迎給食の実施（市内全小学校） ロシアの代表料理（ボルシチとピロシキ）を 提供（6月11日、12日）



写真提供／海老名市

◆海老名駅前芝生広場で パブリックビューイング プール戦「日本対ロシア」（9月20日）



◆海老名運動公園で

ロシア代表地域交流イベント（9月28日）

地域の小中学生、ラグビーサポーターなど約200名参加。海老名ラグビースクール生がロシア国歌を披露、市内全小中学校が各校1旗ずつ応援フラッグを作成し選手に手渡した。またスクール生や中学校ラグビー部生徒を対象にラグビークリニックを実施した。



◆ロシア代表対スコットランド代表戦 観戦バスツアー（10月9日）

小笠山総合公園エコパスタジアムに300人が参加し、ロシア代表を応援した。



〈小田原市〉

- ◆オーストラリア代表1年前キャンプ
歓迎セレモニー（2018年10月29日）
場所：小田原城址公園本丸広場



◆ワラビーズ応援イベントの実施

市内の子どもたちが参加して応援フラッグを作成するワークショップを実施したり（2018年9月30日）、市のごみ収集車をワラビーズカラーにペイントするなど、応援イベントが実施された（6月1日）。ペイントされた車は市内を走り、フラッグは市内や練習場に展示。



◆オーストラリア代表歓迎セレモニー（9月11日）

城山陸上競技場で実施し、市民やラグビーファンら約1,500人が参加。あわせて公開練習を行った。大会優勝を祈願した木製メダルが市内保育園の園児から選手へ渡され、マイケル・フーパー主将からは市長に記念品が贈呈された。



オーストラリア代表歓迎セレモニー

- ◆小田原地下街「ハルネ小田原」で
パブリックビューイング
プール戦「オーストラリア対フィジー」
（9月21日）
プール戦「オーストラリア対ウェールズ」
（9月29日）
準々決勝「オーストラリア対イングランド」
（10月19日）



◆オーストラリアと小田原市内の小学生が交流 （9月30日）

オーストラリアで最も歴史のあるシドニーの私立男子校「キングス・スクール」のラグビー部とサッカー部の小学生26人（12歳）が国際交流プログラムの一貫として小田原を訪れ、市内の小学生たちと文化交流や交流試合を実施した。



◆オーストラリア代表対ジョージア代表戦 観戦バスツアー（10月11日）

小笠山総合公園エコパスタジアムに47人が参加し、オーストラリア代表を応援した。